東京都庭園美術館
紀 要

TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

The Bulletin

2022

東京都庭園美術館 紀要 2022

東京都庭園美術館 紀要 2022

目次

令和３年度修理報告 …… 5
髙橋さおり（東京都庭園美術館 事業係）

朝香宮家のアール・デコ …… 25
牟田行秀（東京都庭園美術館副館長）

令和３年度修理報告

髙橋さおり（東京都庭園美術館 事業係）

Saori TAKAHASHI
Curator
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

令和３年度修理報告

東京都庭園美術館 事業係
高橋さおり

今回の紀要では、「東京都庭園美術館　紀要　2021」において報告できなかった令和３年度に実施した文化財関連修理を報告する。

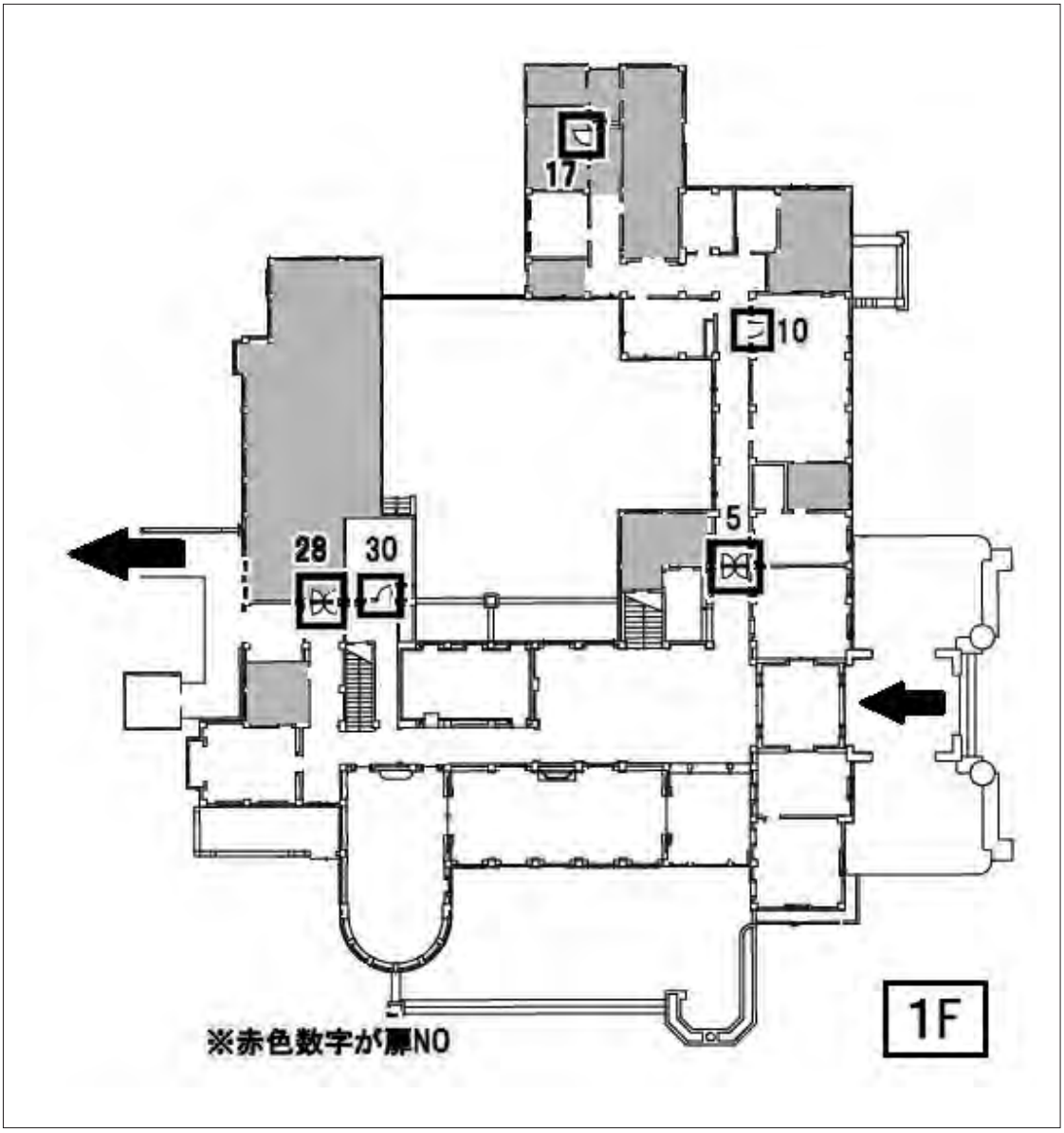
１. 擬宝珠の復旧

１-１. 復旧概要
１-２. 復旧経緯
１-３. 欠損状況
１-４. 復旧方針
　１-４-１. 扉NO. 5 , 28（自由蝶番）
　１-４-２. 扉NO.30（差込蝶番）
１-５. 復旧方法
　１-５-１. 切削加工（NO.10, 17/NO. 5 , 28）
　１-５-２. 鋳物加工（NO.30）
　１-５-２-１. 検証
１-６.まとめ

１.擬宝珠の復旧

１-１.復旧概要

件名：東京都庭園美術館 本館(旧朝香宮邸)　蝶番擬宝珠の復旧委託
期間：2021（令和３）年10月～ 2022（令和４）年３月末日
製作者：合資会社堀商店
技術協力：公益財団法人文化財建造物保存技術協会
復旧内容：旧朝香宮邸内で蝶番に付属する擬宝珠（３種類19個）が欠損していた。これらの擬宝珠３種類19個を利用者の安全性、および文化財保護の観点から復旧した［図１, 表１］。



［図１］復旧箇所

［写真１］扉NO.28　自由蝶番

［写真２］扉NO.30　差込蝶番

［写真３］扉NO.10　管蝶番

［表１］当初擬宝珠と復旧仕様

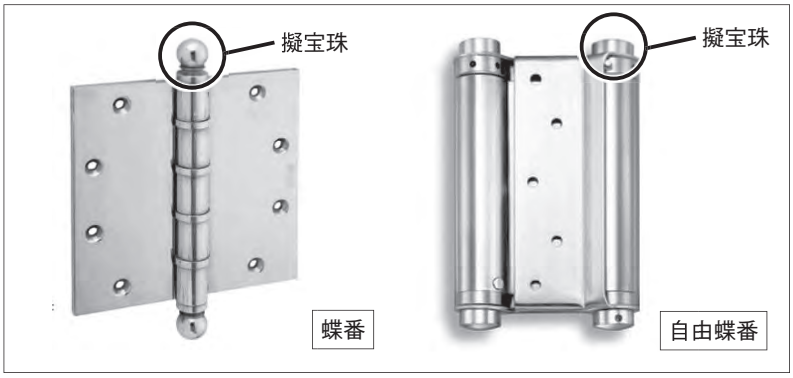
扉No.	素材	加工方法	仕上げ	製作個数	蝶番種類	写真
5 , 28	青銅	切削	ホワイト ブロンズ鍍金	No. 5 ： 5 個 No.28 ： 4 個	自由蝶番 （自由蝶開き）	3.2 ㎝ 2.5 ㎝ 写真 4
30	青銅	鋳物	ホワイト ブロンズ鍍金	8 個	差込蝶番	3.8 ㎝ 2.4 ㎝ 写真 5
10, 17	青銅	切削	磨き	No.10 ： 1 個 No.17 ： 1 個	管蝶番	2.65cm 1.9 ㎝ 写真 6

１- 2 . 復旧経緯

旧朝香宮邸本館内には100を超える扉が存在するが、そのうち1933（昭和８）年オリジナルと考えられ［※１］、現在も取付いている80扉の建具金物類の現状調査を令和２年度に実施した。令和２年度の調査では稼働状態や部品の欠損などを確認し、建具金物全体の状態を把握した。今回の復旧は令和２年度の調査結果に基づき計画し、実施している。

１- 3 . 欠損状況

今回復旧した擬宝珠（ぎぼし）とは、扉を開閉するため扉と枠に羽を取付け開閉の軸となる金物である蝶番の軸心の上下についている金物である［写真７，８］。旧朝香宮邸に使用されている蝶番の擬宝珠は装飾性が高いが、現在流通し使用されている擬宝珠は無装飾の物が多い。蝶番は擬宝珠を取り外すと軸が抜ける構造となっているため、利用者の安全性および文化財保護の観点から欠損した擬宝珠を復旧した。各扉の擬宝珠欠損状況は［図３］に示す通りである。



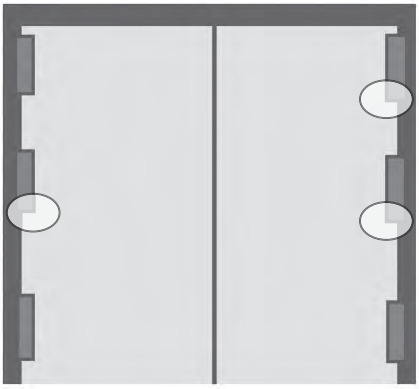
［写真７，８］蝶番の参考写真

［※１］
『朝香宮邸新築工事録［※２］』（宮内庁宮内公文書館所蔵）、『朝香宮邸御新築関係費書類［※３］』（日本大学図書館生産工学部分館所蔵）を参照すると、旧朝香宮邸の建具金物は、①流通品を購入、②製作物、③海外の流通品を購入の大きく３種類に分類する事が出来る。今回、復旧を行ったのは②製作物、③海外の流通品である。

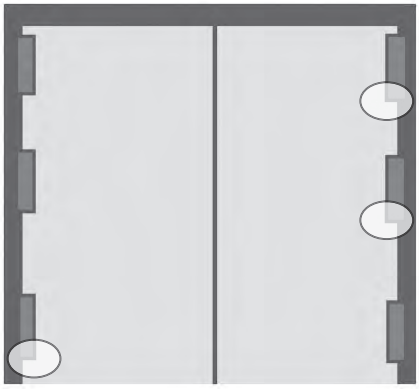
［※２］
『朝香宮邸新築工事録』（宮内庁宮内公文書館所蔵）は、1930（昭和５）年から1933（昭和８）年までの宮内省匠寮の起案・仕様書を宮内省図書寮又は匠寮が評価・選別し、題を付けて11冊にまとめたもの。保存は図書寮が行ってきた［※４］。

［※３］
『朝香宮邸御新築関係費書類』（日本大学図書館生産工学部分館所蔵）は、1929（昭和４）年６月から1933（昭和８）年12月までの朝香宮邸建築に関わった会社・商店・個人の伝票（領収書）を綴った23冊からなる資料。朝香宮家と各取引者とのやりとりの記録は、「領収書」から始まり「支払伝票」「竣工届（納品書）」「請求書」「入札価格」「仕様書」「注文書」の順番で綴られている［※４］。但し、1932（昭和７）年７月から11月までの記録がなく朝香宮邸御新築『関係費書類』を調査研究した天野圭吾は『アール・デコ建築意匠　朝香宮邸の美と技法［※４］』の中で、現存する23冊以外にも数冊あったのではないかと述べている。

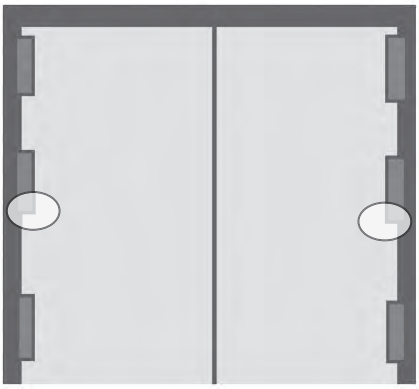
［※４］
東京都庭園美術館編集『アール・デコ建築意匠　朝香宮邸の美と技法』、2014（平成26）年12月、鹿島出版会



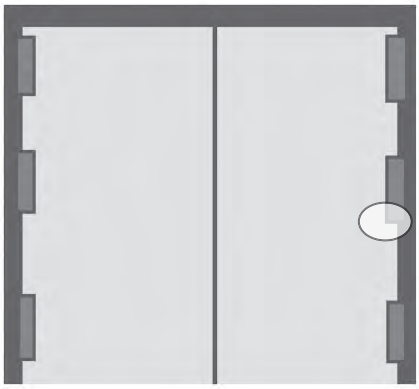
扉No. 5（自由蝶番　展示室側）3 個欠損



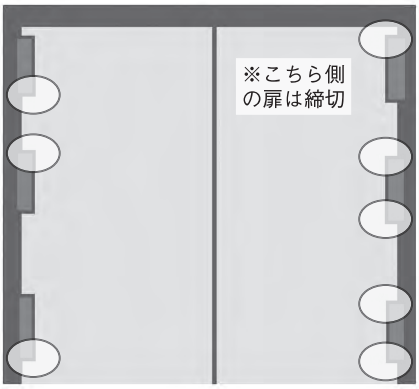
扉No.28（自由蝶番　展示室側）3 個欠損



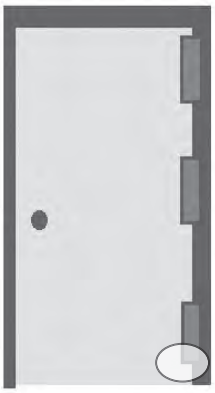
扉No. 5（自由蝶番　ロッカー室側）2 個欠損



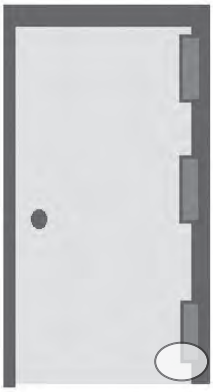
扉No.28（自由蝶番　バックヤード側）1 個欠損



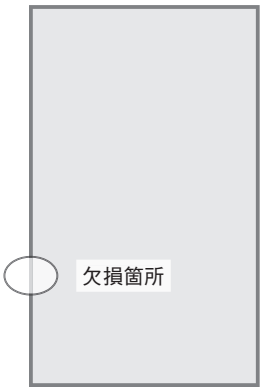
扉No.30（差込蝶番）8 個欠損



扉No.10（管蝶番）1 個欠損



扉No.17（管蝶番）1 個欠損



凡例

［図 3］擬宝珠欠損位置

1-4. 復旧方針

復旧した擬宝珠は、素材・仕上げ・形状などオリジナルの仕様に併せて製作した。素材・仕上げは目視での確認を主としているが、NO.5,28,30の擬宝珠は竣工時の仕様書等資料も参考に決定した。NO.10,17の擬宝珠は竣工時の仕様書等資料において記録が確認できないため、同じ扉に付いている擬宝珠を参考に決定している。形状については、いずれも既存の擬宝珠を採寸し作成した図面基づき決定している。

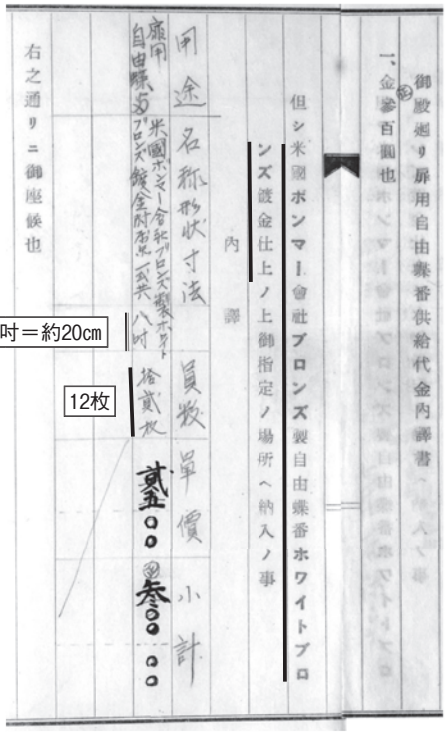
1-4-1. 扉NO.5,28（自由蝶番）

青銅を切削加工し、ホワイトブロンズ鍍金仕上げとした扉NO.5,28の自由蝶番は、日本大学図書館生産工学部分館所蔵『朝香宮邸御新築関係費書類』（以下、『関係費書類』※2）の綴りに「御殿廻り扉用自由蝶番供給代金内譯書」として、ホーン株式会社から米国ボンマー会社ブロンズ製ホワイトブロンズ鍍金仕上げの8インチ（＝約20㎝）の自由蝶番を12枚購入した記録が残っている［資料1～2、表2］。『関係費書類』には設置場所の記載はないものの、旧朝香宮邸内に現存する自由蝶番はNO.5,28の2カ所の扉であり、1つの扉には6枚の蝶番が使用されている（合計12枚）。加えて、蝶番のサイズが約20㎝で蝶番に「BOMMER」と刻印がされていることなどから、「御殿廻り扉用自由蝶番供給代金内譯書」で購入した蝶番であると判断した。また、現存するNO.5,28の蝶番と擬宝珠は、全体的にホワイトシルバーの様な色調であるものの、表面は部分的に緑青が出ているようにも見受けられ、素材は『関係費書類』の通り青銅であると考えられる。

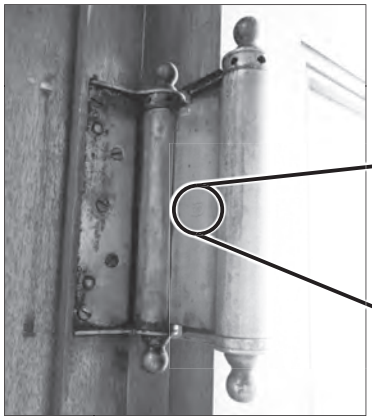
以上の事から、NO.5,28の復旧では『関係費書類』に記載がある通り、ブロンズ（＝青銅）に、ホワイトブロンズ鍍金仕上げとした。加工方法は、擬宝珠の形状から切削加工とした。

件　名	御殿廻り扉用自由蝶番供給代
納入業者	ホーン株式会社（東京市麹町區丸内）
納入品	扉用自由蝶番
名称形状寸法	米國ボンマー会社ブロンズ製ホワイトブロンズ鍍金附属品一式共八吋
納入個数	拾貳枚
単　価	貳五円
合　計	参〇〇円

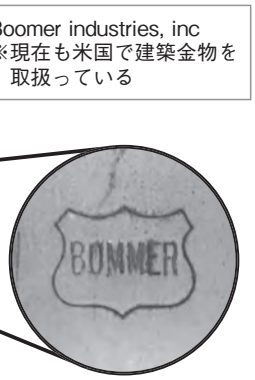
［表2］『朝香宮邸御新築関係費書類』より御殿廻り扉自由蝶番まとめ



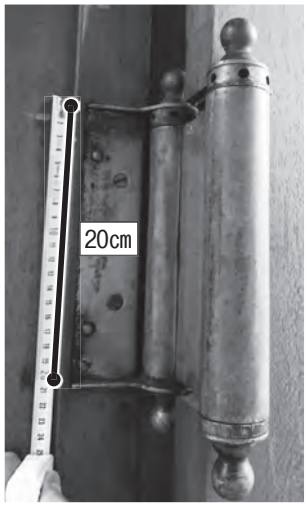
［資料１］『朝香宮邸御新築関係費書類』「御殿廻り扉用自由蝶番供給代金内譯書」より抜粋
日本大学図書館生産工学部分館所蔵



［写真９］NO. 5 扉の自由蝶番



［写真10］刻印の拡大写真

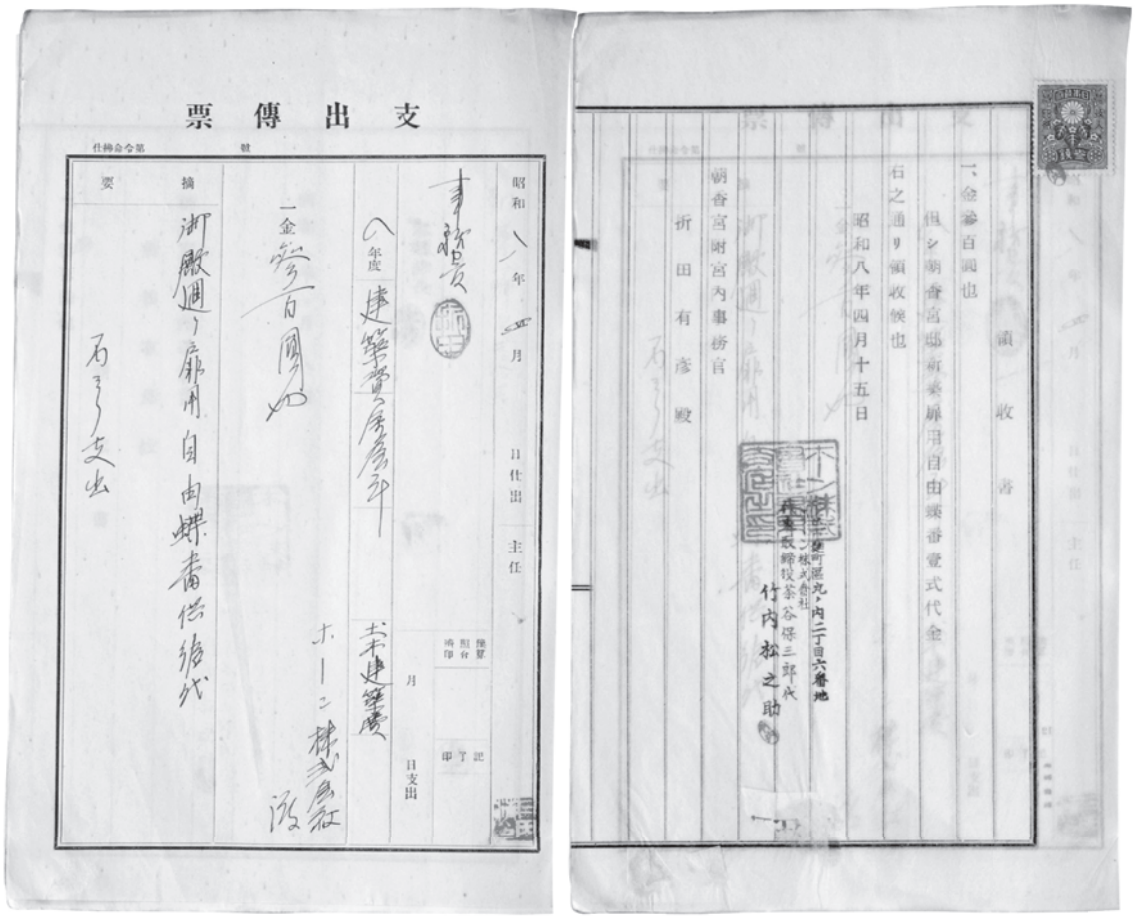


［写真11］蝶番サイズ（NO. 5）

［写真12］オネジサイズ（NO. 5）

［写真13］擬宝珠（NO. 5）

［資料２］『朝香宮邸御新築関係費書類』「御殿廻り扉用自由蝶番供給代金内譯書」日本大学図書館生産工学部分館所蔵



支出傳票

昭和八年四月　日仕出　主任

摘要

御殿廻り扉用自由蝶番供給代

一金參百圓也

右之支出

建築費

年度

土木建築費

ホーン株式會社

記帳　照合　消印

了　印

月　日支出

領收書

一、金參百圓也

但シ朝香宮邸新築扉用自由蝶番壹式代金

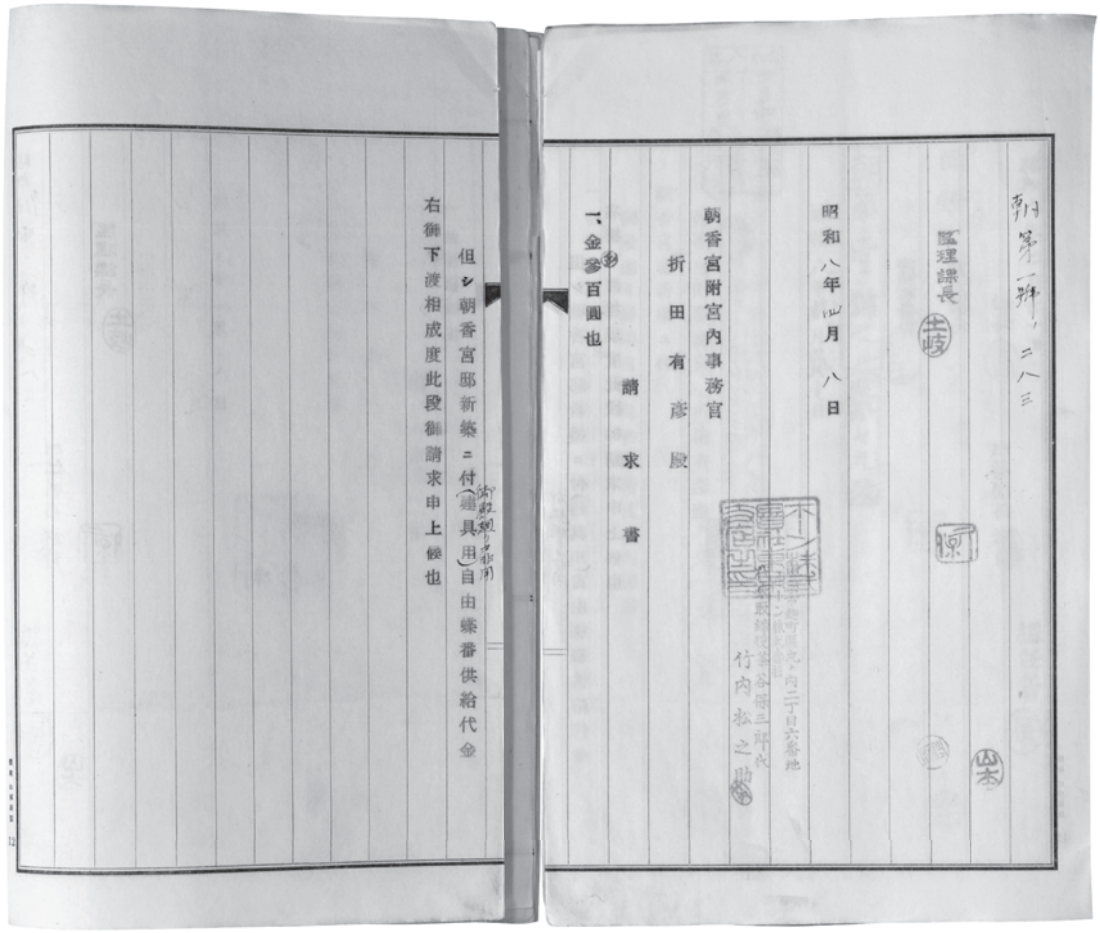
右之通リ領收候也

昭和八年四月十五日

東京市麻布區霞町五番地
ホーン株式會社
東京駅鶴見線茶谷駅三軒茶屋
竹内松之助

朝香宮附宮内事務官

折田有彦殿



朝第一課ノ二八三

監理課長

昭和八年四月八日

東京市麻布區霞町五番地
ホーン株式會社
東京駅鶴見線茶谷駅三軒茶屋
竹内松之助

朝香宮附宮内事務官

折田有彦殿

請求書

一、金參百圓也

但シ朝香宮邸新築ニ付御殿廻り扉用自由蝶番供給代金

右御下渡相成度此段御請求申上候也

昭和八年二月廿一日

課長　建築係長

担任者

朝第壹號　第七九號

昭和八年弐月廿七日

朝香宮邸附事務官　折田有彦殿

朝香宮邸新築ニ付

御殿廻リ扉用自由蝶番供給代金内譯書

一、金参百圓也

内譯

用途	名称形状寸法	員数	単價	小計
扉用自由蝶番	米國ホンマー會社製ブロンズ製ホワイトブロンズ鍍金仕上ノ上御指定ノ場所ヘ納入ノ事	拾貳枚	貳五〇〇	参〇〇〇〇〇

但シ米國ホンマー會社ブロンズ製自由蝶番ホワイトブロンズ鍍金仕上ノ上御指定ノ場所ヘ納入ノ事

右之通リニ御座候也

委任狀

當社儀今般東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地ホーン株式會社東京支店竹内右之助ヲ以テ部理代理人ト相定メ左ノ權限ノ事項ヲ代理爲致候

一、朝香宮邸新築ニ付扉用自由蝶番供給ニ關シ見積書提出ノ件

一、契約締結ノ件

一、物品納入並ニ取下ノ件

一、納入品代金請求並ニ領收ノ件

一、復代理人撰任ノ件

右委任狀仍而如件

昭和　年　月　日

田中進商店

1-4-2. 扉NO.30（差込蝶番）

扉NO.30は、竣工時点では第４テレースへ出る外部扉であり［※５、図２］その他の外部扉と同様にスチール製であったものと推測され、現在付いている木製扉は第４テレースをトイレに改変した時点で交換されたものと考えられる［※６］。スチール製三方枠は撤去せず、廊下側は木製枠としているが、トイレ内側は現在もスチールの枠が残っている。以上の理由から今回復旧した擬宝珠は御殿廻り外部扉と同じデザインとした［写真20］。

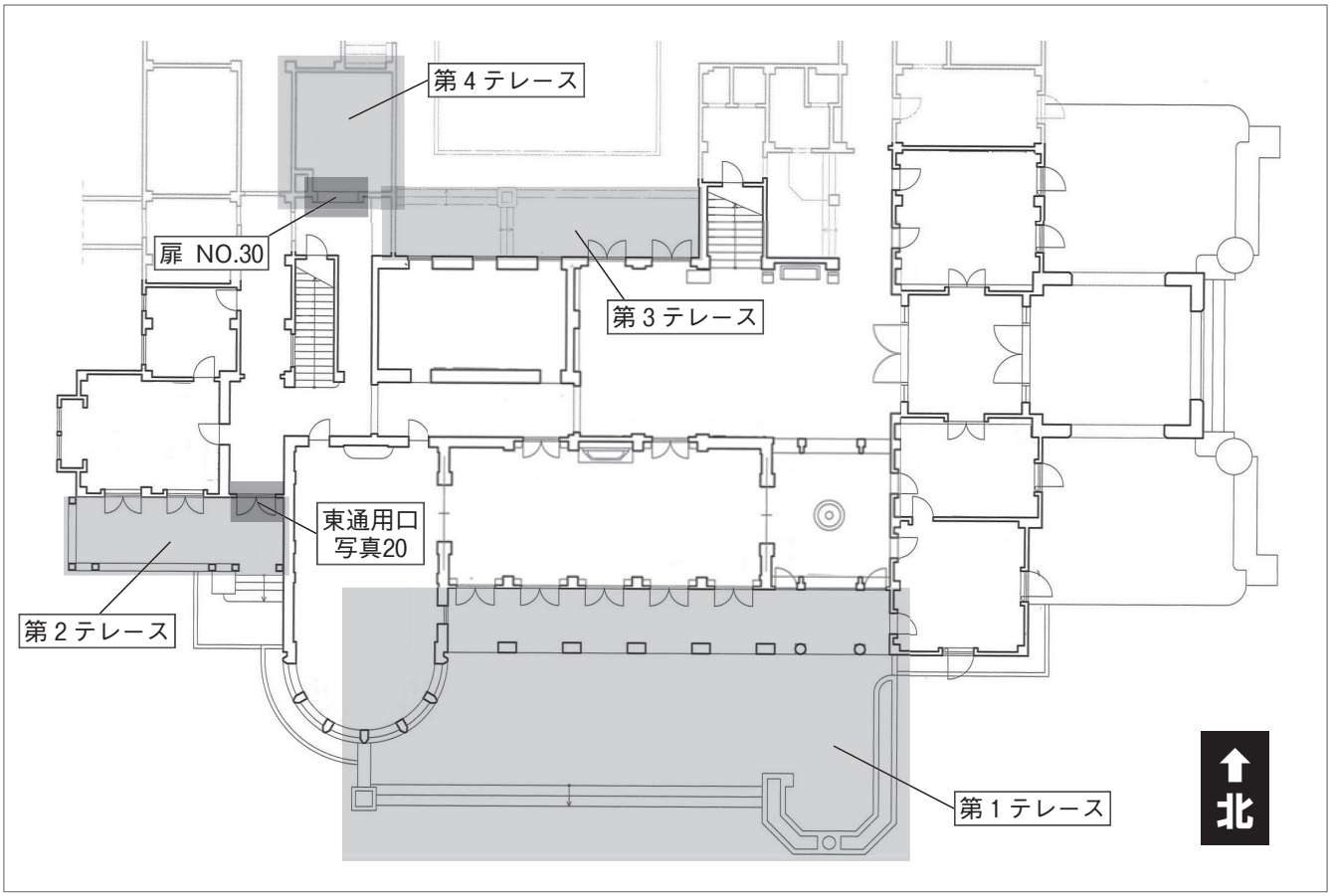
擬宝珠を復旧した蝶番は『関係費書類』の記録から素材や技法は辿れないが、仕様書である『朝香宮邸新築工事録［※２］』「朝香宮邸新築二付御殿廻り建具用蝶番製作仕様書」において、御殿廻りの大小198枚の蝶番は「ブロンズ（＝青銅）に、ホワイトブロンズ鍍金仕上げ」と記載されている［資料３］。扉NO.30は現在、各蝶番・スチール製三方枠共に茶色に塗装されているが、塗膜がはがれた部分からシルバーの表面を確認することができた［写真16］。

実物及び『朝香宮邸新築工事録』の記載から、NO.30の復旧はブロンズ（＝青銅）に、ホワイトブロンズ鍍金仕上げとし、擬宝珠の形状から鋳物加工とした。

［※５］
竣工時の旧朝香宮邸には、大客室前の第１テレース、小食堂前の第２テレース、大広間前中庭側の第３テレース、現在の女子トイレの位置第４テレースの合計４つのテラスがあった［※７］。

［※６］
西武時代の改変の様子は未調査のため不明だが、1983（昭和58）年に美術館となるにあたり改修した際の図面では、第４テレースではなく既に「男子トイレ」がこの位置に存在しているため、トイレへの改修は西武時代に実施したのではないかと筆者は考えている。またその後、男子トイレは、1994（平成６）年の東京都庭園美術館（旧朝香宮邸）改修工事において女子トイレとなり、現在も引き続き来館者用女子トイレ出入口用扉として使用され続けている。

［※７］
「テレース」とは、「テラス」のことと解釈できるが、仕様書である『朝香宮邸新築工事録』、『関係費書類』に「テレース」との記載があるため、本文ではそのまま使用した。



［図２］朝香宮邸竣工時の１階間取り（部分）

朝香宮邸新築ニ付御殿廻リ建具用蝶番製作仕様書

一、御殿廻り各所用蝶番製作
　大小　百九拾八枚

請負ノ要項

一、納入場所
　朝香宮邸新築工事場内指定ノ場所ニ持込ミ検査ヲ受クベシ

一、納入期限
　昭和七年十一月廿五日近ニ製作納入スベシ

右仕様書

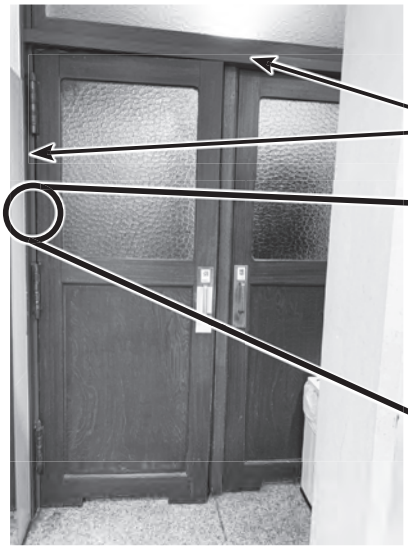
一、本蝶番ハブロンズ製ニシテ特許一四四五四、ニ依ル貯油装置及仝一三〇六四九之軸ノ自働廻轉装置ヲ施シ別紙図面ノ通リ製作シホワイトブロンズ鍍金仕上ケトス

一、本蝶番ニ使用ノ附属木捻ハブロンズニテ特製シ前仝鍍金仕上ゲトス

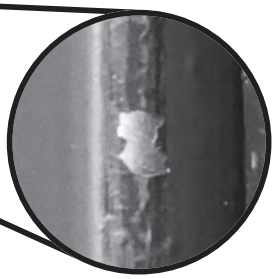
以上

［資料３］『朝香宮邸新築工事録　建築工事ノ部第一二号
朝香宮邸新築二付御殿廻リ建具用蝶番製作仕様書』より抜粋
宮内庁宮内公文書館所蔵

［写真14］廊下側（NO.30）

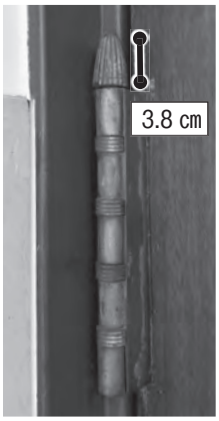


［写真15］トイレ側（NO.30）



［写真16］拡大写真
塗膜が剥がれ、
三方枠がスチール製
という事が分かる

［写真17］
蝶番サイズ（NO.30）



［写真18・19］擬宝珠サイズと雌ネジの様子

［写真20］
参考：東通用口スチール製扉の蝶番

1 - 5 . 復旧方法

復旧は、擬宝珠の形状から切削加工と鋳物加工を行った。

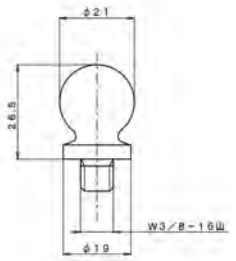
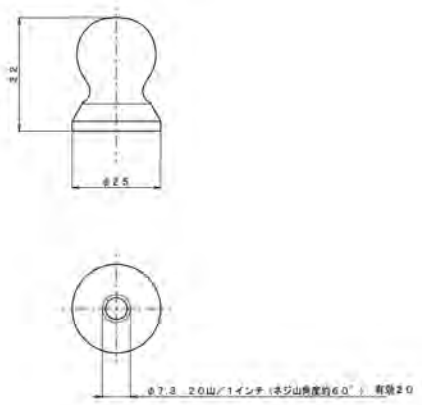
1 - 5 - 1 . 切削加工（NO.10, 17 ／ NO. 5 , 28）

①青銅丸棒を切削加工で図面の通りに形状を形成した[写真21, 22, 23]。

②既存のねじサイズに併せて、扉NO. 5 , 28は雌ネジ部を製作し、扉NO.10, 17は雄ネジ部を製作した。

③扉NO. 5 , 28はホワイトブロンズ鍍金仕上げ［写真27］を行い、扉NO.10, 17は磨き仕上げ［写真24, 25］とした。

［表 3 ］切削加工（NO.10, 17 ／ NO. 5 , 28）

扉番号	10,17	5 ,28
製作個数	２個	９個
素　材	青銅	青銅
加工方法	切削加工	切削加工
仕上げ	磨き	ホワイトブロンス鍍金
外径	φ約 9.2 ㎜	φ約 7.3 ㎜ ※軸芯側の雄ネジを計測
ネ　ジ	ウィットネジW３／８-16山 ※外径より判断	雄ネジの外径に合う規格がなかったため、ゲージを作製しネジ部の寸法を決めた。軸芯側の雄ネジはネジ山が潰れており、９箇所中４箇所入らなかったため、４個はネジの穴を広げて入るよう現場で調整した。
製作工程	計測 ｜ 製作図作成 ｜ 切削加工 ｜ ネジ部加工 ｜ 仕上げ ｜ 寸法検査 ｜ 磨き	計測 ｜ 製作図作成 ｜ 切削加工 ｜ ネジ部加工 ｜ 仕上げ ｜ 寸法検査 ｜ ホワイトブロンズ鍍金
図　面		

［写真21］丸棒の状態
（NO.10, 17）

［写真22］先端切削
（NO.10, 17）

［写真23］切削完了
（NO.10, 17）

［写真24］磨き
（NO.10, 17）

［写真25］完成
（NO.10, 17）

［写真26］取付完了
（NO.17）

［写真27］ホワイトブロンズ鍍金
（NO. 5 , 28）

［写真28, 29］完成

［写真30］取付完了
（NO. 5 , 28）

1 - 5 - 2 . 鋳物加工（NO.30）

①図面に併せて、原型である木型（＝マスター型（オス））を製作した［写真31］。

※原型は鋳造時に、何割か小さくなる事を想定して製作する。

②マスター型（オス）からゴム型（メス）を製作する［写真32］。

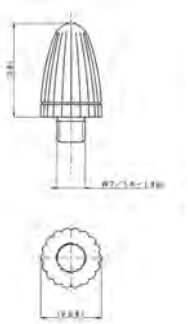
④ゴム型（メス）にワックスを流し使用型（オス）を製作する［写真33, 34］。

⑤使用型から鋳型を製作し鋳造する［写真35, 36］。

⑥既存雄ネジと同サイズの雄ネジ部を製作する。

⑦仕上げに、ホワイトブロンズ鍍金を行う［写真37, 38］。

［表４］鋳物加工（NO.30）

扉番号	30
製作個数	８個
素　材	青銅
加工方法	鋳物加工
仕上げ	ホワイトブロンズ鍍金
外　径	φ約11.1㎜
ネ　ジ	ウィットネジW７ ／ 16 ー 14山 ※外径より判断
製作工程	計測 ｜ 製作図作成 ｜ 型製作 ｜ 型確認 ｜ 鋳物製作 ｜ 仕上げ ｜ ネジ部加工 ｜ 寸法検査 ｜ ホワイトブロンズ鍍金
図　面	

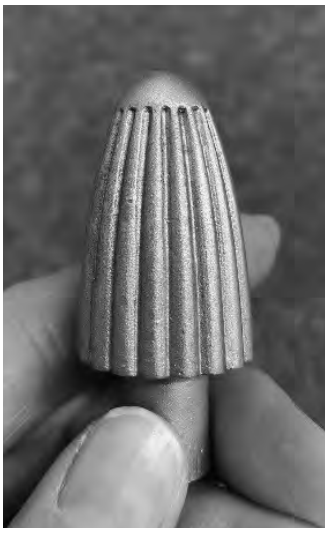
［写真31］木型（マスター型）製作
（NO.30）

［写真32］ゴム型製作
（NO.30）

［写真33］型へロウの流し込み
（NO.30）

［写真34］ロウ型組立
（NO.30）

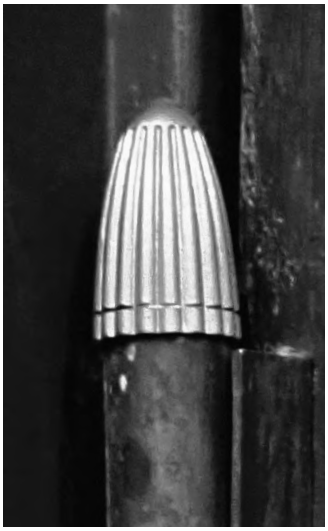
［写真35］鋳造
（NO.30）



［写真36］鋳物完成
（NO.30）

［写真37］ホワイトブロンズ鍍金
（NO.30）

［写真38］完成
（NO.30）



［写真39］取付完了
（NO.30）

1-5-2-1.検証

NO.30擬宝珠の鋳型は見本となる擬宝珠を貸出し作成した。NO.30の擬宝珠は、直径24㎜の中に18本の溝が均等に配置されている。溝は経年による欠けや凹み等が無数にあり、１つの擬宝珠を３Dスキャンしても母型とは成得ないため、傷が少ない綺麗な溝を１本選び出し母型に18本の溝を作成した［表５］。鋳物は固まる際に型から何割か縮むため、鋳型母型段階では出来上がりの形状寸法が正確に分からないことから、鋳物が完成した段階［写真36］で文化財建造物保存技術協会、堀商店と共に出来上がりの検証を以下の通りおこなった。

今回復旧した鋳物製の擬宝珠は、主に殿下廻りの鋼製建具に使用されているが同じサイズ･形状の蝶番と擬宝珠のうち、外部廻りの擬宝珠［※図３、点線／丸］は建具と同じ茶色の塗装が厚く塗られてしまっており、溝の形状を判別するのが難しかった。そのため、形状を確認するため内部の擬宝珠を用い外観、上部の溝、底部の溝の３つを比較検証した。

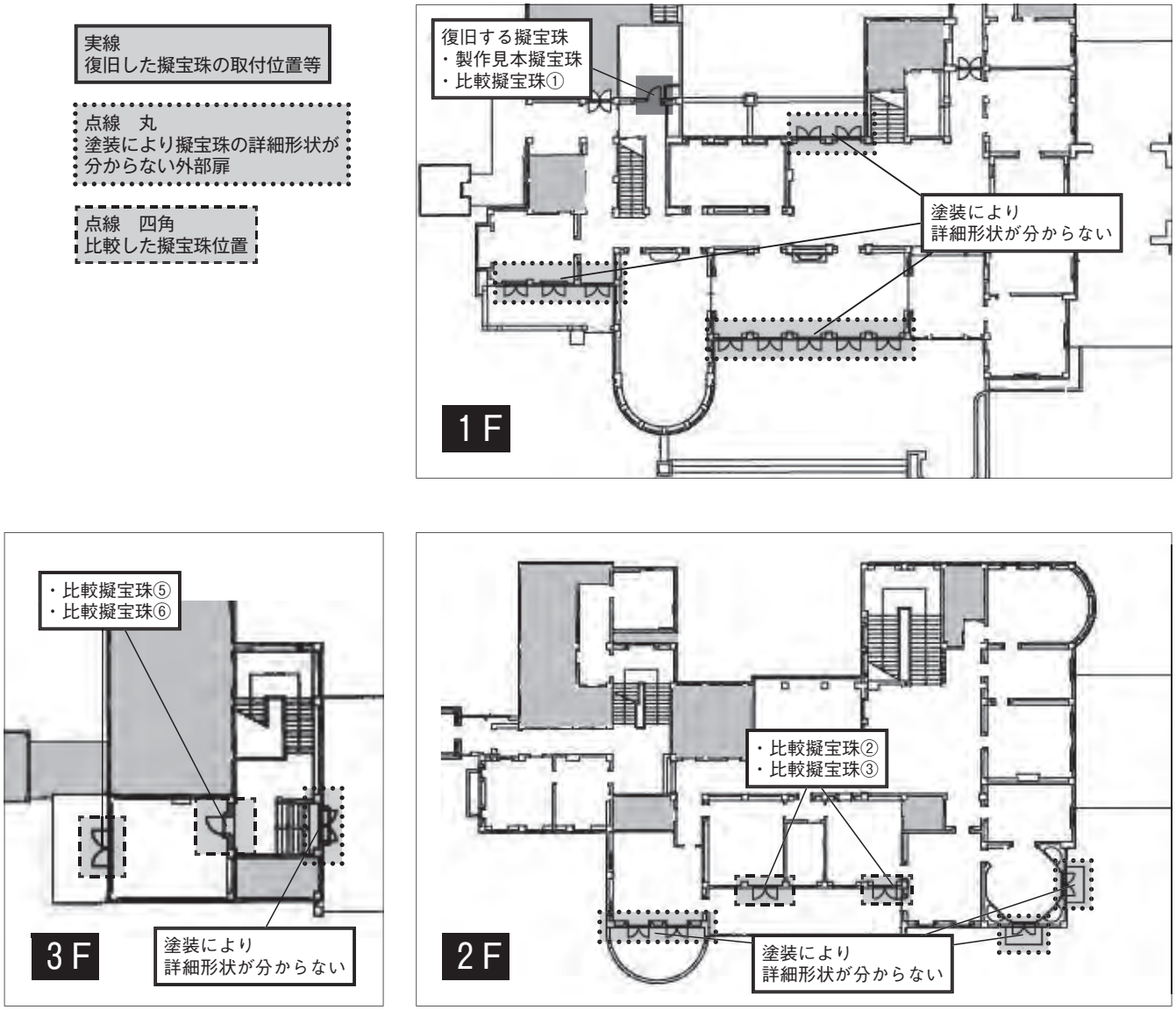
①今回復旧する女子トイレ扉に取付いている別の擬宝珠と比較
②内部建具に取付けられている擬宝珠と比較
（外部廻りと異なり塗装が厚くないため溝の形状が確認できた）

検証に際して、塗装された擬宝珠では形状が判別しづらく、溝の先端が止まっているか流れているかが議論となった［写真43］。これは、元の鋳型の彫り始めはどこが始点なのかが焦点となっている訳であるが、塗装の薄い擬宝珠と比較することで溝の先端からネジ方向に向けて彫ったものではないかとなった［写真44～46］。

底部の溝についても検証を行った。新調品は線が甘くなり、角が丸くなりがちとの事から、溝の底が尖っているか、丸いかを確認した。その結果、溝の角は丸い物と尖っているものの２種類あることが分かった。復旧した擬宝珠は全ての溝を丸く製作したが、既存の擬宝珠で尖っているものは経年により欠けや摩耗によるものかと推測した。これらの観察は当初の製法調査であり、意匠調査となり、今回の復旧の製法を決める重要な調査である。

［表５］母型製作方法

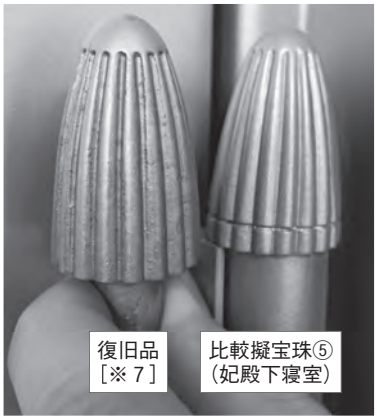
1933（昭和８）年オリジナル	木材への彫刻で母型を製作したものと思われる（木型）。 手彫のためか上部の溝の止めがまちまちであり、また横一文字の溝は、鋳抜いた後で彫ったものと思われる。 ※溝が止まっているもの、流れてしまっているものなどがある。
2022（令和３）年復旧品	復旧する１F女子トイレに取付いている擬宝珠の一つを見本として製作。 18本ある溝をそのまま模倣するわけではなく、美しい選りすぐりの溝を１本選定し、その１本を見本に18本の溝を作成。 ※表面各所に欠けや凹みがない溝を選定した。



［図３］比較検証した擬宝珠の取付位置

【写真40】擬宝珠比較　外観①

［※７］
横溝は鍍金後に入れたため、比較した時点では入っていない。



【写真41】擬宝珠比較　外観②

【写真42】擬宝珠比較　外観③

上部の溝１
（女子トイレ）

［写真43］製作見本擬宝珠

上部の溝２
（女子トイレ）

［写真44］比較擬宝珠①

上部の溝３
（ウィンターガーデン）

［写真45］比較擬宝珠②

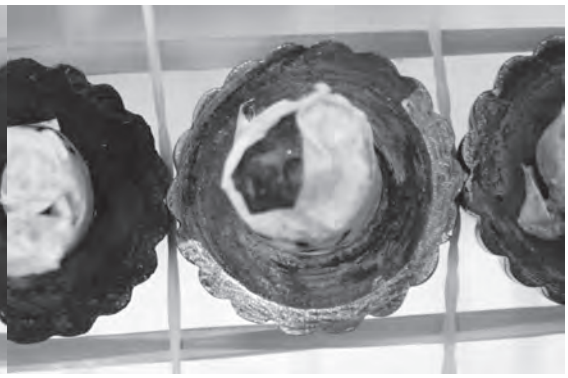
上部の溝４
（ウィンターガーデン）

［写真46］比較擬宝珠③

復旧品

製作見本擬宝珠
（女子トイレ）

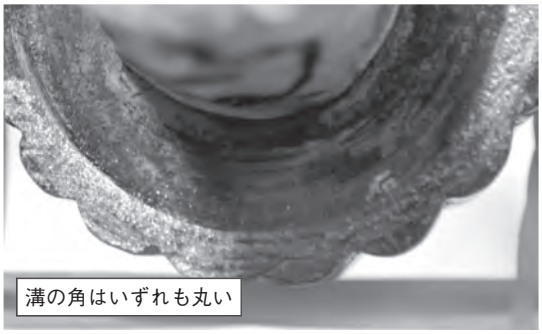
［写真47］擬宝珠比較　底の溝①



比較擬宝珠①
（女子トイレ）

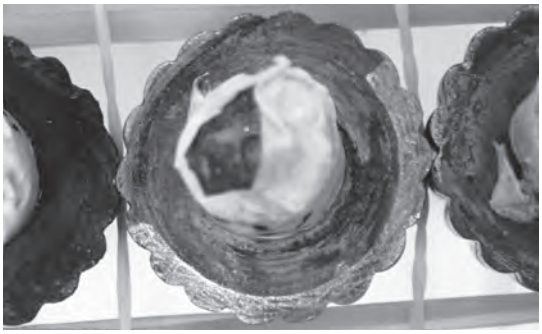
比較擬宝珠②
（ウィンターガーデン）

［写真48］擬宝珠比較　底の溝②



比較擬宝珠②　底の溝③
（ウィンターガーデン）

［写真49］



製作見本擬宝珠　底の溝④
（女子トイレ）

［写真50］

1-6.まとめ

今回の復旧は、令和２年度調査に基づき計画したが、各部材に関する総括的な調査の重要性を感じている。特にフランスからの輸入品を用いた建具金物は繊細なものが多く、一度壊れてしまうと直すのも難しい傾向にあるため、日頃からハンドル、鍵など現在の状況を把握しておくことで、問題点の抽出や維持管理の方針などを検討しやすくなると考えている。当館は保存しながら美術館として活用しているため日常的な点検が重要であり、令和２年度に行った総括的な調査を基に日常的な点検を行うことで、ちょっとした不具合などを見逃さないようにしてゆきたい。

なお、今回擬宝珠を復旧した扉については長年開閉運動をするうちに自然に軸心が上がり、擬宝珠が緩むことで欠損してしまったものと推測される。いずれの扉も、１日に何度も開閉する使用頻度の高い扉であるため、定期的な増し締めなどの対策を行う予定である。

最後に今回の修理、また本稿執筆において多大な協力をいただいた関係各位にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。

＜参考文献＞

・山本貞吉「建築金物」城南書院　1937（昭和12）年
・山本貞吉「新建築金物」城南書院　1959（昭和34）年
・「建築學會パンフレット　第四輯　第八號　建具金物」建築學會発行　1932（昭和７）年
・中村達太郎「新しき建築學階梯　巻の三」丸善株式会社　1933（昭和８）年
・「建築用金物材料」住友金属工業　1937（昭和12）年

朝香宮家のアール・デコ

牟田行秀（東京都庭園美術館副館長）

Yukihide MUTA
Vice Director
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

旧朝香宮邸の歩き方
――パリでみつけた宮邸誕生の物語

東京都庭園美術館副館長
牟田行秀

※本稿は、2023 年 2 月 17 日に東京都庭園美術館にて開催された「美術館講座 第 3 回」の収録原稿を掲載したものです。

僕（このほうが話しやすいので、今回は「僕」でお許しください）がこの庭園美術館に学芸員として採用された1992年の時点で、旧朝香宮邸に関してわかっていたことというのは、実はとても限られたものでしかありませんでした。

宮内省内匠寮（たくみりょう）工務課の技師、権藤要吉が基本設計を担当し、主要室内の内装についてはフランス人のインテリアデザイナー、アンリ・ラパンに委ねられ、1933年に建てられた朝香宮家の邸宅であるということは、1983年に美術館が開館した時点ですでにわかっていました。

それではなぜラパンが起用されたのか、あるいはラパンとはどのような人物であったのかということになると、実はまだまだわからないことだらけだったのです。ましてや大食堂の壁面レリーフ、銀色のプラスターの壁面がありますけれども、そのレリーフを手掛けたブランショとなると、生没年も含めて本当に謎だらけの彫刻家だったのです。そうしたところから僕の学芸員人生は始まり、現在に至るまでの大半を朝香宮邸の謎解きに費やしてきました。結果、学芸員としては他に大して誇れる実績もないまま来てしまったのですけれども。

これまでの講座で第 1 回、第 2 回を務めていただいた先生方のように、例えばアール・デコの真髄は何かとか、旧朝香宮邸の建築的特性についてというような専門的な話はできませんけれども、代わりに今日は、自分自身が好奇心の赴くままに続けてきた宮邸探求の旅を皆さんと一緒に振り返りたいと思います。

（ここからはちょっと画像を見ながらお話をしたいと思いますので、少し暗くしていただけないでしょうか。）

というわけで、題して「旧朝香宮邸の歩き方――パリでみつけた宮邸誕生の物語」というデジタル紙芝居の始まりです。ここからは投影画像に沿ってお話をしていきたいと思います。

土地の歴史

ここで自己紹介を兼ねまして、旧朝香宮邸となる前のこの地の歴史について、少し振り返ってみたいと思います。僕はもともと美術館の学芸員になる前に、港区内で遺跡の発掘調査をしていました。発掘調査といっても港区内ですから、大半が江戸時代の遺跡です。一般にイメージするような繊細で知的な作業ではなくて、円匙（エンピ）と呼んでいた大きなスコップを持ってガンガン地面を掘るという肉体労働をしていました。そのよう

国土地理院『地理院地図（電子国土Web)』より白金台周辺

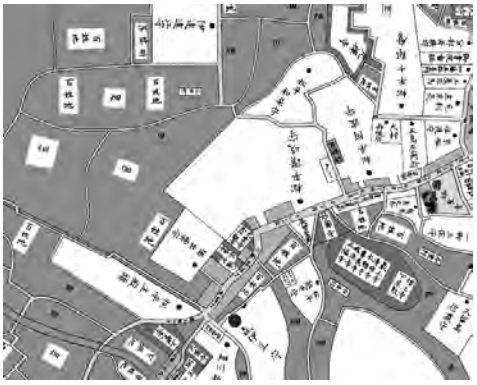
な環境で過ごしてきたこともありまして、現在美術館となっているこの白金台周辺の歴史についても、もともと関心はもっていました。

これは国土地理院さんが発行している地図です。この地図の真ん中あたりに庭園美術館があります。まわりの部分は現在、国立科学博物館附属自然教育園という施設になっています。

この地図上、二つの施設の間には境界がありません。よく一体の施設だと間違われます。自然教育園の中に庭園美術館があると思われている方も、日本中にまだたくさんいらっしゃるのですが、あくまでもこちら〔庭園美術館〕は都立の施設で、そのまわりを囲む自然教育園は国立の施設です。ただそれを近代まで遡って見てみると、もともとこの地は「白金御料地」という、現在では史跡に指定されている皇室財産でした。

そしてこの地にはそれ以前からの歴史もあります。もともとこの周辺では「白金館址遺跡」という遺跡の発掘も行われていますが、中世まで遡るとこの地には「白金長者」なる豪族の館があったという伝承が残されています。その痕跡らしきものが自然教育園の中に「館跡」という形で紹介されていますし、また当館の敷地内でもそれらしき土塁の跡を見ることができます。

近世紀に入ると、この地は讃岐高松藩主松平家の下屋敷として使用されました。これは江戸時代に発行された『江戸切絵図』というものから引っ張ってきたもので、この部分〔中央〕が現在の庭園美術館と自然教育園に相当する部分です。



『尾張屋版 江戸切絵図』「目黒白金辺図」より

真ん中あたりに「松平讃岐守」と書いてある部分が、今の庭園美術館と自然教育園のある土地になります。

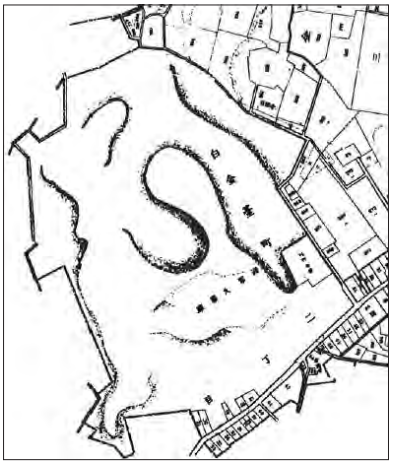
讃岐高松藩松平家の下屋敷が具体的にどのような様子であったのかは、現在資料が残されていないので詳しくわかってはいません。ただ同藩歴代藩主の業績を各代ごとに記した記録があり、この白金台の下屋敷は先代藩主の隠居所であったことなどが書かれています。

また5代頼恭というお殿様の時代に、国元の高松では御薬園が作られます。それを受けて白金台の下屋敷の地でも薬草の栽培が始まり、それを指導したのは平賀源内であるといわれています。実際にこの地を源内が訪れたかどうかはわかりませんが、江戸時代にはそうした使われ方をしていた土地だと記録にあります。

皆さんのなかで、高松に行かれた際に栗林公園という綺麗な庭園を訪れた方もいらっしゃると思います。この白金台の下屋敷の地にも栗林公園を模して作られた庭園があったと記録されています。地形的に見ますと当時御殿のような建築物があったのは、おそらく現在美術館の建物が建っているあたりだったのではないかと推測されます。そして現在の自然教育園を含む大半の地は、もともと庭園として活用されていたのではないかと思われます。当館の庭園内にも立派な松が生えていますが、これは宮邸の建設に当たって、下屋敷時代からの樹々を意図的に残した名残のようです。

さて近代に入ると、この松平家下屋敷は明治、大正初期にかけて海陸軍の火薬庫として使用されるようになります。

目黒通りが地図の左下から右斜め上にかけて横切っています。現在の美術館正門は中央下あたりです。のちに朝香宮邸になるのは地図の中央付近から左下半にかけての一画で、こうして見ると火薬庫時代に建築物



左：内務省地理局「東京実測図」（1888年）より
右：東京郵便電信局『東京芝区全図』（1898年）より

が置かれていたのは、大体が自然教育園の敷地内ということになります。

実は、皆さんが今いらっしゃるこの新館を建てるとき、発掘調査を行いました。ここはもともと「旧白金御料地」という遺跡になっているからです。

これはそのときの写真です。

現在の駐車場付近から検出された大溝

この新館の裏手、駐車場になっているあたりを掘ったところ、大きな溝が出てきました。これは近世以前にまで遡る可能性もあると推測されています。中世、この地に「白金長者」なる（長者かどうかは知りませんけれども）豪族の屋敷があったことが伝承として残っていますが、そのことを想起させて大変興味深い発見ではないかなと思います。

実は、美術館の周囲をずっと囲むように、ちょっとした木立が残されているのですが、これは土塁の跡だと推測されます。おそらくこの旧宮邸を囲むように土塁があり、その中に堀と思われる溝が掘られていたという、まさに中世の館の特徴を想起させる痕跡が発掘調査でも確認されたということです。

続いてこれは、火薬庫時代の遺構だと思われるものです。まだ現在の新館を建て直す前の古い建物が建っているときに発掘調査をしました。その際に出てきた火薬庫時代の痕跡です。これは今も遺跡として保存し、皆さんの足元にそのまま残されています。

この地が火薬庫時代を経て御料地になるまでの沿革は、宮内庁の公文書館で確認できます。当時の帝室林野局というところで、『白金御料地

海陸軍火薬庫時代の遺構

沿革誌』という詳細な資料が作られました。

本地御料ニ編入ノ事情ニ就キテハ当時宮内省ニ於テ皇族御繁栄ニ伴ヒ将来皇族ニ賜フヘキ邸地トシテ或ハ又霞ヶ関離宮廃止ヲ予想シテ迎賓館設立計画等ノ為メ予メ其敷地ヲ都下ニ用意セントスル処アリシニ由ルト仄聞ス

帝室林野局『白金御料地沿革誌』より（以下の引用も同様）

＊本文章内では漢字を旧字から新字に改めています

つまりもともと海陸軍の火薬庫であったところを、皇室の繁栄に伴って新たな宮邸用地として活用するため御料地に編入したということが読み取れます。

さらに見ていくと、ここですね。

大正十年一月十七日 本御料地ノ西南部ニ於テ九千八百坪ヲ朝香宮賜邸地トシテ御料地ヨリ除却セリ之ヲ最初ノ宮邸地域トス

もともと明治、大正に入って、新たな皇族のレジデンスを作る計画があって、最初に朝香宮家がその一部を賜ったということになります。

ところがそれから間もなく、この部分です。

本御料地ハ〔…〕利用方針ノ変更ニ由リ昭和三年六月十二日当局ニ返還セラレタリ

要するに皇室のレジデンスとすることをやめて、もとの御料地として皇室にお返ししますよということです。少しややこしいのですが、レジデンスにするという使い方と皇室財産としての御料地という扱いは違うようです。ここで読み取れるのは、朝香宮が御料地の一部を賜っただけで、他の宮家に下賜することはもうやめたということです。

その際にですね、

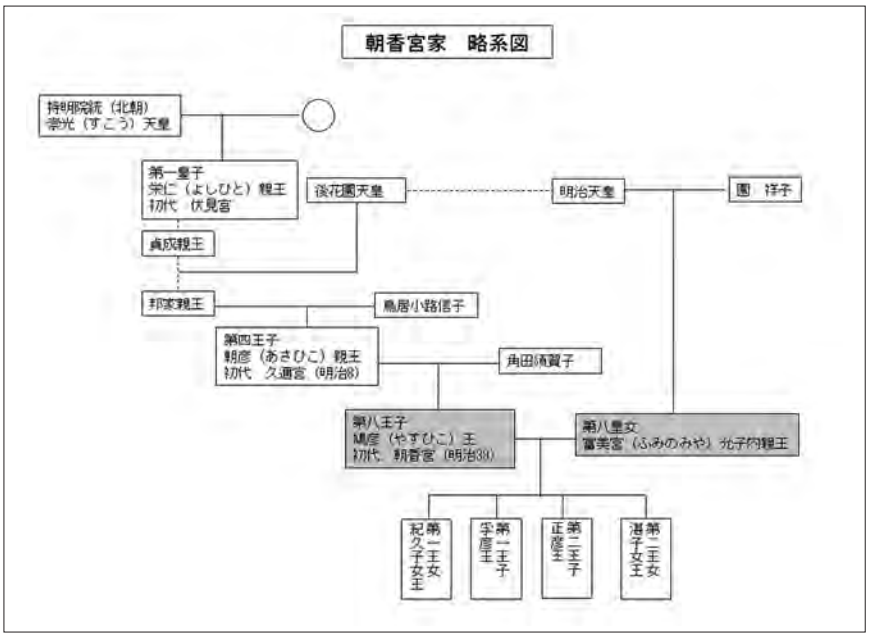
内匠寮主管中〔…〕本御料地内ニ於テ地均シ、旧火薬庫土堤ノ取毀、排水管ノ埋設其他施設スル処多カリキ

ということが書いてあります。今、自然教育園になっているところも含めて、将来の皇族邸地とするための基本的な工事は、実は済んでいたものと思われます。ですから自然教育園も地下を掘ると、このときに整備された排水管や何かが出てくるのではないかと思っています。

朝香宮家の歴史

今となっては「朝香宮って誰？」という世代もすごく増えてきているので、ここで改めておさらいをしておきたいと思います。

まず朝香宮家の妃殿下〔允子妃〕のほうは大変わかりやすく、明治天皇の第八皇女です。天皇家の内親王ということになります。一方の殿下〔朝香宮鳩彦王〕ですが、実は天皇家と直接的につながるのは南北朝の時代まで遡らないといけません。



崇光天皇あたりから始まって、伏見宮家の初代である栄仁親王から、室町時代、江戸時代とずっと続いてきた歴史のある宮家です。そして明治に入って伏見宮邦家親王という方のところから一気に新設の宮家が増え始めます。

先ほどご紹介した『白金御料地沿革誌』にあった「皇族御繁栄ニ伴ヒ」とは、こういった背景があったわけです。要するに宮家が増えてしまって、これらの方々の邸宅を用意しなければいけなかったので、この白金台の地が選ばれたということのようです。

さて朝香宮鳩彦王のお父宮である久邇宮朝彦親王という方について、日頃ご紹介する機会もなかなかないので、少しお話しさせていただきます。

久邇宮朝彦親王

伏見宮邦家親王の第四王子として誕生した朝彦親王は、若くして出家されました。青蓮院という京都の門跡寺院の門主になったのです。ですが少々故あって還俗をされて、青蓮院にいるまま宮様になり、最初は青

蓮院宮と名乗られていました。その後、中川宮（なかがわのみや）と名乗られるようになります。

中川宮であった頃が、この方にとって一番激動の時代だったと思います。当時はまだ江戸時代です。そして皇女和宮と十四代将軍徳川家茂のご結婚、いわゆる公武合体を朝廷側の窓口として推進したのがこの方でした。それ以降、八月十八日の政変ですとか、長州派の派閥によるいろいろな圧力がかかっているところを、幕府方の松平容保（京都守護職）たちと一緒に跳ねのけます。しかしそれが故に明治に入ってから、明治維新を成した旧薩長の勢力に虐げられてしまうのです。旧広島藩にお預けになったりして不遇の時代をかこつ憂き目に遭います。

それを明治天皇が大変憐れまれ、朝彦親王に久邇宮という称号を授けて新たな宮家を創立させます。その久邇宮家の第八王子として誕生されたのが朝香宮鳩彦王となるわけです。

左：朝香宮允子妃
右：朝香宮鳩彦王

次の写真のうち右端が鳩彦王です。左端は弟の東久邇宮稔彦（なるひこ）王、中央が従兄に当たる北白川宮成久（なるひさ）王で、お三方とも同年代です。

左から
東久邇宮稔彦王、北白川宮成久王、朝香宮鳩彦王

こちらは允子妃がまだお若かった頃のお写真です。明治天皇には四人の皇女がいましたが、御長女がこちら〔写真一番左〕の常宮昌子（つねのみやまさこ）内親王。次女〔手前〕が周宮房子（かねのみやふさこ）内親王。そして三番目〔一番右〕が富美宮（ふみのみや）允子内親王。そして一番下〔中央〕が泰宮聡子（やすのみやとしこ）内親王です。

この明治天皇の四皇女はそれぞれが各宮家に嫁がれています。御長女

手前から周宮房子内親王、
泰宮聡子内親王、
常宮昌子内親王（左奥）、
富美宮允子内親王（右奥）

は竹田宮家、二番目が北白川宮家、三番目が朝香宮家、そして四番目が東久邇宮家というように、明治天皇の四皇女は、先ほどの鳩彦王の兄弟あるいは従兄の方々とそれぞれご結婚されているのです。皆さん年代も近いですし、そういったご関係もあって非常に仲が良かったようです。朝香宮家には４人のお子様がいらっしゃいました。御長女が紀久子（きくこ）女王、二番目が孚彦（たかひこ）王、三番目が正彦（ただひこ）王、四番目が湛子（きよこ）女王というように二男二女です。しかし朝香宮邸で実際にお部屋が設けられたのは、このお三方〔孚彦王、正彦王、湛子女王〕のものでした。この宮邸が完成する前に、御長女の紀久子女王は佐賀の旧藩主であった鍋島侯爵家に嫁がれていらっしゃったのです。下のお三方と両殿下のお住まいとして建てられたのが朝香宮邸ということになります。

ちなみに鳩彦王はもともと久邇宮家にお生まれになったのですが、明治39（1906）年に明治天皇の特旨をもって朝香宮の称号を賜り宮家を創立されています。これにも少々おもしろい話があります。

新しい皇族家ができるとき、皇室にゆかりのある土地やお寺、あるいは山の名前が選ばれるということは、皆さんご存知だと思います。朝香宮家に関しても最初は「朝熊宮（あさまのみや）」になるはずだったらしいのです。伊勢に朝熊ヶ岳という山があります。ここは伊勢神宮の鬼門に当たるところで、金剛證寺というお寺が建っています。父宮の朝彦親王が伊勢神宮の祭主を務められていたご縁での選定でした。ところが、「熊」が入っていかめしい宮号は嫌だと、どうも鳩彦王が仰ったそうです。それで朝熊ヶ岳のすぐ近くにあった朝香山に由来して、「朝香宮」ではどうかということになったそうです。本当か嘘かわかりませんけれども、朝香家の方々は鳩彦王からそう伺ったと仰っています。

これは、明治43（1910）年に鳩彦王と允子内親王がご結婚され、祝宴が開かれた際に記念の品として贈られたボンボニエールです。

朝香宮鳩彦王と允子内親王御成婚記念のボンボニエール　1910年　個人蔵

朝香宮鳩彦王の海外視察

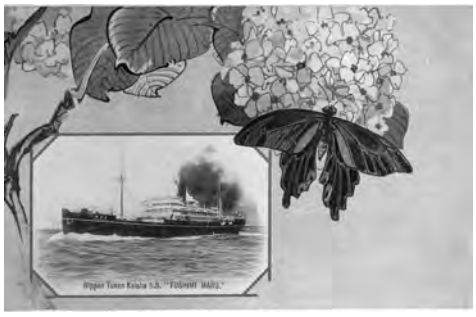
朝香宮家が成立してご家族が徐々に増えていくなか、鳩彦王は大正11（1922）年に単身欧米への視察旅行に出られます。「軍事御研究」という名目でした。当時皇族方の習いとして、ある年齢以上になると見聞を広めるために海外視察の旅行に出ることが、ごく当たり前に行われていま

出立時の鳩彦王と允子妃

した。朝香宮家の場合もそれに則って鳩彦王がヨーロッパへ旅立ったということです。

当時のことですから飛行機の直行便などというものはもちろんありません。まずは東京から特別列車で北九州の門司へ行きます。そして門司港から日本郵船の伏見丸という船に乗ってヨーロッパのマルセイユまで行くという欧州航路でした。門司からマルセイユまで、当時の船旅で大体40日ほどかかったといわれています。香港や上海、エジプトなどいろいろ寄港をしていくのですね。寄港地で数日の停泊期間があるので、現地に上陸して観光をしたりということが、鳩彦王に限らずごく日常的に行われていたようです。この船旅の途中、鳩彦王はカイロをまわってピラミッドを見学されたりもしています。

下：日本郵船伏見丸の絵葉書
右：ピラミッドの前で記念撮影をする鳩彦王



ホテル・マジェスティックの絵葉書

そしてマルセイユから鉄路でパリに入られるわけです。パリに到着した鳩彦王は、ホテル・マジェスティックという高級ホテルにまず落ち着かれました。

先ほど鳩彦王単身でというお話をしましたが、実際には身のまわりのお世話をする御用掛（がかり）の方がお二人随行されています。ボディガードとしての藤岡萬蔵武官と、通訳を兼ねた学習院大学の英語教師、稲葉三郎先生を伴って、三人で渡欧されるわけです。

この渡欧に当たって、皇族の身分のままだと堅苦しいですし、警衛を付けなければならないなど、相手国に対しても、また待遇に関してもいろいろと気を使わなければいけないことから、やはりこれも当時の習いとして、皇族（朝香宮）ではなく伯爵として出かけるのです。「朝伯（爵）」という仮の身分です。伯爵として日常生活を送るため、現地ではかなり自由なふるまいができたようです。

当時すでに、鳩彦王の従兄に当たる北白川宮成久王と房子妃（允子妃の実姉）夫妻がパリに滞在していました。成久王も「北伯」としてパリでのご生活を楽しんでおられたようです。しかし翌大正12（1923）年、北伯夫妻とともにドライブに出られた先で、鳩彦王は自動車事故に遭われてしまいます。

事故現場の写真

これは実際の事故現場の写真です。

この時、成久王がハンドルを握られていました。スピードが出過ぎてしまってハンドル操作を誤り、沿道の木に激突してしまったという痛ましい事故です。この事故で成久王はほぼ即死でした。そして同乗されていた房子妃と鳩彦王も大けがを負ってしまいます。瀕死の重傷だったそ

うです。

これは当時発行された新聞記事です。大々的に取り上げられていますね。

事故を報じる当時の新聞各紙

車が激突したアカシアの並木はもうなくなってしまいましたけれども、僕が訪れたときにはこのような北白川宮成久王の慰霊碑が建っていました。

最近Googleマップで改めて事故現場を調べたら、この慰霊碑は撤去されてしまっていました。代わりに一本、ポールの先に取り付けられた鉄板みたいなものに、日の丸の印が付いているだけになっていました。残念です。

事故現場付近に建つ北白川宮成久王の慰霊碑
（2003年当時）

僕が現地を訪れた際、事故現場の近くに自動車修理工場がありました。事故に遭った車はその修理工場が引き取って、何十年にも渡ってずっと保管してくださっていたとのことです。すでに車体は失われていて、ラジエーターグリルとタイヤだけが残っていました。これらを感慨深げに眺めていると、「欲しかったらあげるよ」と言われました。

ここ〔事故車写真のラジエーター部分〕にアビヨンボアザン（ボアザン飛行機）というエンブレムがついています。これがもう当時の写真と照らし合わせても同じものなのです。事故車のパーツなんて気味悪いなと思いますけれども、やはりこの瞬間から朝香宮邸の物語は始まっていると思うのです。このまま朽ちていくのはどうしても惜しいなと思った

左：事故車のラジエーターグリル
右：事故車のタイヤ

ので、ではいただきますと…。ただし持って帰るには重かったので、後から輸送業者を手配して引き取らせていただきました。今は庭園美術館の収蔵品になっています。取り敢えず保護はしたのですが、資料の性格上なかなか公開しづらいですよね。いつか機会があったら皆さんにもご覧いただきたいと思っています。

事故に遭ってしまった鳩彦王について申しますと、最初は現場近くのベルネーという町の病院に救急搬送され、そこで応急処置を施されます。その後アルトマンという外科の権威の先生がいらっしゃったパリのヌイイの病院に転院され、そこで回復を待つということになりました。

左から朝香宮鳩彦王、稲葉三郎氏、相馬孟胤子爵

これは病床にいる鳩彦王〔写真左〕と、通訳で行かれた稲葉先生〔中央〕、御用掛の相馬孟胤（たけたね）子爵〔右〕です。相馬子爵は、江戸時代は磐城中村藩のお殿様だったお家のご当主です。祖先は平将門にまで遡るという名家です。鳩彦王の事故後、新たに御用係として現地に赴かれています。

もうお一方、通訳として同行した学習院大学の稲葉先生ですが、現地で張り切って英語でしゃべったところ、あなたの英語はシェイクスピアだと言われてほとんど通じなかったそうです。もし今日このなかに稲葉先生のご関係の方がいらっしゃいましたら申し訳ありません。

話を事故の件に戻しますと、この報を受けて、日本に残っていた允子妃は急遽パリへと赴くことになります。この事故が起きたのは４月１日でした。一報を聞いた允子妃は「エイプリルフールの冗談でしょう」と仰ったと伝えられていますが、とにもかくにも鳩彦王の看護のため、急遽允子妃もパリへと向かわれました。鳩彦王と同じく船旅で現地へと向かうわけですね。

左：寄港地での允子妃一行
右：病床の鳩彦王と允子妃

パリに着き、病床にいる鳩彦王を訪ねて無事であることを確認した允子妃は、安心してパリでの生活を謳歌されます。この写真でも、もうお姿がパリジェンヌそのものになりきっていますよね。ただこれは別に軽薄なふるまいということでは全然なくて、当時の皇族は今でいうところのファッションリーダーなのです。『皇族画報』などというものが今以上に盛んに出版されておりました。当時の女性たちは、最先端のファッションを身にまとわれた妃殿下の姿を見て最新のモードを知るといった時代だったのです。ですから允子妃が最新のファッションを取り入れていることは、ある意味日本の文化度がそれだけ高まったことを意味するので、当時としては大変好ましいこととして捉えられていたようです。

ブーローニュの森を散策する鳩彦王と允子妃

さて、鳩彦王は退院できて少しずつ日常生活を取り戻されていきます。これはおそらくブーローニュの森にある池を、リハビリを兼ねて散策されているときの写真だと思います。この後、徐々に夫妻揃ってのパリ生活を楽しまれるようになっていきました。

ところで、鳩彦王は最初、ホテル・マジェスティックに入られたというお話をしました。その後、パリ16区のアパルトマンに移り、そこをパリにおける拠点として生活を開始します。このアパルトマンは、ヴィクトル・ユーゴー広場という、凱旋門近くの瀟洒な住宅街の中にある広場の近くに所在していました。

これはパリから日本のご家族にあてて送られた絵葉書です。

コノ建物ノツヾキガ
私タチノ
アッパルトマンデス
コノ銅像ハ毎日ナガメテ居マス

日本の家族へ送られた絵葉書

現在のヴィクトル・ユーゴー広場はこんな感じです。銅像は戦争のために失われてしまったのか、いまは代わりに噴水が設置されています。それ以外は周辺の建物を含めてそのまま残っていますから、景観は当時とほとんど変わっていません。

アパルトマンがある通りは、現在はレイモン・ポワンカレ通りと改称されていますが、当時はマラコフ通りといわれていました。88番地にある、今も残っているこのアパルトマンの最上階がパリでの「朝香宮御殿」でした。

左：夫妻が暮らしたアパルトマン
右：ヴィクトル・ユーゴー広場

ここを拠点に、最新のファッションに身を包んだ允子妃は、御用掛として一緒に渡仏した杉岡ゆく女史と一緒にパリのいろいろなところを訪れています。これはエッフェル塔の足元です。

鳩彦王のほうはといいますと、軍事視察の合間に現地の貴族たちと交

エッフェル塔の下で佇む允子妃（右）
と杉岡御用係（左）

フランスの貴族と交流する
朝香宮鳩彦王

流をしています。伯爵名義で渡仏していても、皇族としての立場で交流を図ることは行われていたようです。これは侯爵家の方々と一緒に狩猟を楽しんでいるときの写真ですね。もうすっかり怪我も癒えて、日常の生活を取り戻されました。

実は鳩彦王は写真がお好きだったようで、滞欧中にドイツからカメラを取り寄せています。それを使って、允子妃や御用係の方たちとの記念撮影を楽しんでいます。この写真の撮影場所はどこだったか最初わからなかったのですけれども、数年前にパリ市内のビュット・ショーモン公園を訪ねたときに「ここだ！」と思いました。

右：ビュット・ショーモン公園を訪れた允子妃
左：現在のビュット・ショーモン公園

この岩山は人工的に作られています。ここはかつて採石場だった土地を、後に公園として整備したというものです。素敵な公園ですからパリに行かれることがあったら、ぜひ訪れてみてください。

《受領證綴》東京都庭園美術館蔵

パリでの生活

現在、庭園美術館には鳩彦王が単身日本を発たれてから、允子妃とともに夫妻揃ってパリを出発するまでに使ったお金の領収書（受領證）が、ほぼすべて保存されています。ただこれは宮邸時代から庭園美術館にずっとあったわけではなくて、古書店に出たものを美術館が買い戻したものです。

購入に際して、当時の管理職からずいぶん嫌味を言われました。「領

収書というものは本来、物を買ったらタダでもらうものであって、お金を払って買うものじゃない」と。ですが今になってみると、買っておいて良かったと思っています。例えばこの写真右下に写っているのは、パリにあるラリックのブティックで同社の代表的な作品（《火の鳥》など）を買ったときの領収書なのです。

この領収書を丹念に調べることによって、夫妻の現地での生活がほぼわかりました。いつ何時どこに行って何を食べたか、何を見たかなどですね。それとともに残された状況証拠すなわち写真など、いろいろなものを突き合わせていくと、向こうでの生活がある程度イメージできるようになります。

左：左から允子妃、宮岡御用掛
右：現地で購入したレコード
東京都庭園美術館蔵

これはマニュエル兄弟写真館という当時パリでも人気のあったスタジオで撮られた、允子妃と宮岡御用掛のポートレートです。宮岡御用掛は允子妃をパリまで送り届けた後、すぐに帰国してしまったので、その際の記念に撮影されたものだと思います。夫妻はレコードといいますか音楽もたいへんお好きで、現地で蓄音機と大量のレコードを買われています。パリのアパルトマンで日常的に音楽を楽しまれていたのではないでしょうか。

お食事については、メゾン・プルニエという高級海鮮料理で有名なお店に結構頻繁に通われていました。このレストランはお住まいがあったヴィクトル・ユーゴー広場のすぐ近くにあって、アール・デコのデザイナーが手掛けた内外装になっています。これは夫妻が通っていた当時の絵葉書ですが、まさにアール・デコそのものです。

当時発行された
メゾン・プルニエの絵葉書

この店は今も残っています。印象的な外観ですね。店内はこのような感じです。夫妻が海鮮料理のキャビアを楽しんでいた頃の内装が、今もそのまま残っています。

左：現在のメゾン・プルニエ（外観）
右：メゾン・プルニエの店内

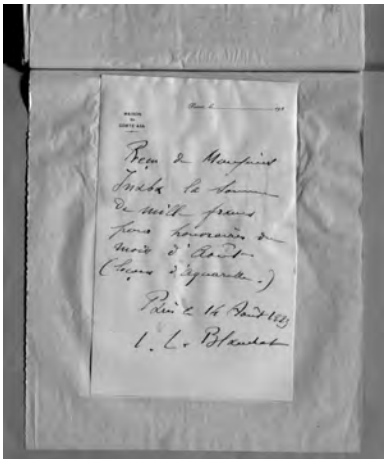
ちなみにこれ、写真は撮らせてもらえたのですが、お値段が高級過ぎて食べる勇気はありませんでした。

允子妃はパリで新たに水彩画を習い始めました。もともと幼少の頃から芸術に対する造詣がとても深い方でして、特に絵を描くことがお好きだったようです。これは現地で水彩画を習い始めた頃に描かれた作品です。「NA」というのは「Nobuko Asaka」のイニシャルですね。結構お上手でいらっしゃいます。

允子妃による水彩画

允子妃に水彩画の指導をしていたのは誰か…。先ほどの受領証を丹念に見ていくと出てきました。これです。手書きで「水彩画のレッスン料として」と記してあります。

この〔領収書下の〕部分、「I.L. Blanchot（ブランショ）」とサインされています。このお話の冒頭で、大食堂の壁面レリーフを手掛けたブランショに関しては謎の彫刻家以外の何者でもなかったとお話ししましたけれども、ここで彼との接点が出てきたのです。これを見つけたときは本当に鳥肌が立ちました。「見つけた！」って感じです。



水彩画レッスン料の受領証

左：水彩画を描く允子妃
右：ブランショ《朝香宮允子妃殿下小立像》
1925年　東京都庭園美術館蔵

ブランショの領収書は複数枚残っています。おそらくパリ滞在中、允子妃は定期的にブランショによる水彩画の指導を受けていたのではないかなと思います。このブランショと宮家との交流はかなり親密なものであったようです。

この小立像は允子妃が現地を立たれる際にブランショがプレゼントしたものです。ブランショはもともと彫刻家ですから、允子妃をかたどった立像を贈ったのですね。これは建物公開展の際に公開していますので、ぜひその機会にご覧いただきたいです。

立像の台座側面に、フランス語で〈記念に〉と彫り込みがなされています。ブランショと朝香宮家との間には、お金を払って水彩画のレッスンを受けていた、単なる先生と生徒という以上の関係があったのではないかなと、僕は思っています。

ちなみにブランショについては調べれば調べるほど、かわいそうになってしまうのです。アール・ヌーヴォーの頃はそこそこ仕事があったのですが、アール・デコの時代になるとまったく売れなくなってしまって、美術に関する本を出したり、今でいうカルチャーセンターの講師をしたり、このような水彩画の指導などをして生活していたようです。

アール・デコ博覧会

さて、そうこうしているうちに1925年を迎え、ここでいよいよアール・デコ博覧会というものが出てくるわけです。

この博覧会がどのようなものであったかという話は、今まで庭園美術館で開催された展覧会で多々ご紹介してきていますし、これからの展示でも取り上げる機会がたくさんあると思うので省略させていただきます。ともあれ当時の最先端の装飾美術が集められた博覧会でした。この会場を夫妻も揃って訪れています。

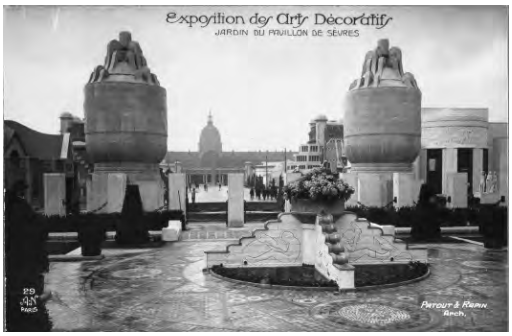
これは博覧会が開催されたパリのアンヴァリッド前にある広場です。この手前にセーヌ川が流れていて、左岸と右岸の間にアレクサンドルⅢ世橋という綺麗な橋が架かっています。

この博覧会を主催した装飾美術家協会という、インテリアデザイナーの集まりである団体があったのですが、その副会長をしていたのがアンリ・ラパンです。のちに朝香宮邸の内装を手掛けることになるラパンが、この博覧会でインテリアデザイナーとしても実行委員としても活躍をし

アール・デコ博覧会の絵葉書

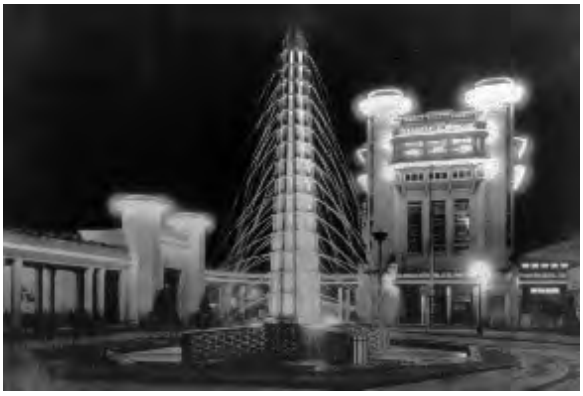
現在のアンヴァリッド前の広場

ていました。
これはラパンがデザインを手掛けたセーヴル製陶所館の中庭です。



セーヴル製陶所館の中庭

少しわかりにくいですが、中庭の奥、アンヴァリッドの前に広場があって、その真ん中にガラスの噴水が立っています。これは当時すでに巨匠として世界的な名声を博していた、ルネ・ラリックが手掛けた大噴水です。噴水の夜景はこちらです。



左：ルネ・ラリックの大噴水（夜景）
右：ルネ・ラリック

この噴水は一つひとつが女神の形をしたガラスでできていて、それを積み上げています。写真からも、女神像の上部から水が噴き出ている様子が分かります。

このアール・デコ博覧会には「光と水の祭典」というキャッチフレーズがついています。当時パリの市内に電気の供給が始まり、それまでガス灯であった街中の照明が次々と電気照明に変わりつつあった時代です。そうした時代に開かれた博覧会なので、電気と水が各所で積極的に取り入れられていました。また噴水から流れ落ちる水の描く放物線などは、アール・デコの代表的な装飾のモチーフになっていたりもしています。

ラリックはメイン会場の一番奥まった、中心となる広場に噴水を展示し、そのすぐ近くに自身のパビリオン（展示館）をもち、その中でガラス作品を展示しています。文字通りラリックはこの博覧会において大活躍をしていました。

その博覧会を、鳩彦王と允子妃も1925年の７月９日に夫妻揃って見学をされています。この時は日本の皇族「朝香宮」としての正式視察でした。案内に立っているのは、当時のフランス美術局の局長であったポール・レオンという方です。このときの映像が残されています。建物公開展の折などに時々流していますので、ご覧になった方もいらっしゃるか

もしれません。

リュールマンという当時大変人気のあった装飾美術家がいて、その人が手掛けたコレクター館というパビリオンを夫妻はまず、ご覧になっています。

アール・デコ博を見学する朝香宮夫妻

これはそこから出てくるときの映像から切り取った画像です。画像左下が允子妃で、中央が鳩彦王ですね。実際の映像で見ると、允子妃の表情が大変印象的です。満面の笑みをたたえていて、そこで見たものが本当に心に残ったというか、感銘を受けたのではないかと思わせるような表情をなさっています。

コレクター館を見学し終えた
朝香宮鳩彦王（写真中央）と允子妃（左端）

ついでラパンが中心になって手掛けていた国立セーヴル製陶所館での映像の一部です。セーヴル製陶所というフランスを代表する窯があり、そこが出展していたパビリオンを見学して、今、出てきたところですね。

国立セーヴル製陶所館を見学し終えた朝香宮夫妻
允子妃（右から２番目）の肩付近に壺が写っている

ちなみにここ〔画像右〕に壺が映っています。これ実は、色がついて

いまして青い壺なのです。おそらくこのときの壺ではないかと思うものが今、庭園美術館に収蔵品としてあります。

もともと庭園美術館には博覧会に出展されていた壺をプロトタイプとして、後からセーヴルで量産された同型の壺を収蔵しているのですが、ある日突然某ネットオークションに「東京都庭園美術館旧蔵　セーヴルの蓋付壺」と題された青い壺が出品されていることに美術館のスタッフが気付いて、ちょっとした騒ぎになりました。

報告を受けて僕は何をしたか……。慌てて収蔵庫に走りました。そして実際に収蔵品の壺がちゃんとあるかどうか、つまり盗まれてはいないかということをまず確認しました。ありましたね。安心しました本当に(笑)。

ということは、オークションに出ている「庭園美術館旧蔵」の青い壺は何なのだということになります。幸いにしてこの壺を出品していたのはきちんとした国内のギャラリーさんで、連絡先も明記されていたので、即座に電話をかけました。

「もしもし、庭園美術館です。当館旧蔵の壺というものを現在ご出品されていますけれど、そちらで間違いありませんか。貴社がオークションで庭園美術館旧蔵と仰っている壺ですが、現在もこちらの収蔵庫にあります。不思議ですね」

という話をしたら先方も慌てて、「ちょっと事実誤認だったようです。一旦出品を取り下げます」と仰るので、すかさず「その壺、見せてください」とお願いしました。

この壺を見に出品元のギャラリーまで行ってみたところ、なんていうんですかね。これは飾りの壺ですから、実際の壺としての役割はもともとないのです。庭園美術館にもとからある青い壺のほうも底に穴が開いています。なぜかというと、実用というよりも飾り壺ですから、台に固定するための穴が開いているのです。オークションに出品されていた壺も、やはり底部に穴が開いていて、その横に「1925」と記してありました。底部には汚れも付着していて、どこかに固定されていた痕跡がある。館で持っている壺よりも出来が良い。これ欲しい、と即座に思いましたね。

先ほどお話しした通り、アール・デコ博でのセーヴル製陶所のパビリオン入口の両脇には、二個一対でこの壺と同型の青い壺が飾られていました。この壺に「1925」と書かれていたことから考えると、この壺は博覧会に出品されていたもののうちどちらかなのではと思ったからです。まあ、思っているだけで確証はないのですが、そのほうが何か夢がありませんか。

そこから真剣にギャラリーと価格交渉をしました。学芸員ってそういうこともやるのですよ。館で何を収蔵するかというときも、きちんと調査研究をして、お値段の交渉もします。そして東京都の委員会にかけて許可をいただいたものが、晴れて美術館の収蔵品になるわけです。この壺も、幸いギャラリーのご理解を得ることができて、現在では当館の収蔵品となっています。

1925年に製作され、オークションで売りに出されたこのセーヴルの壺が、もしかしたらアール・デコ博覧会の際に朝香宮夫妻と出会っていたかもしれないな、そう思いながらこれからの展覧会を見ていただくと、とても幸せな気分になれるのではないかと思います（笑)。

ヨーロッパ周遊の旅

パリでの生活を満喫されたご夫妻は、その後ヨーロッパ周遊の旅へと出られます。やはり「伯爵」といっても本来は皇族ですから、やることのスケールが違いますね。自動車を買って、その車で各国へ旅立たれるわけです。

いろいろなところに行っています。そのうちの「南佛御旅程概見圖」というものが残っています。

朝香宮夫妻と現地にて購入された車

行きは鉄道を使い、帰りは車でパリまで戻っています。その旅行のときの写真が残されています。ちなみに行きは列車を使い、車で帰ってきたということは、往路は運転手さん一人でこの長距離を回送したのでしょうね。大変だったと思います。

この「南仏御旅程」の目的地は、カンヌ近くにあるカップ・マルタンという小さな町でした。そこに当時、大変なお金持ちであり実力者であったアルベール・カーンという銀行家が別邸を構えていまして、そこを訪ねたわけです。朝香宮家はカーンと親交があり、その関係は帰国してからも続いています。

カーンは資産家ですから、カラー写真を撮ることができる当時最新の技術「オートクローム」を扱えるカメラマンも雇っていたのですね。これはオートクローム技法で撮られた夫妻の写真です。現在パリにあるアルベール・カーン博物館に原版があります。日本から着物をお持ちになって、こうした交流の場では積極的にお召しになっていたのでしょうね。

そしてそのカーンの別邸からパリに向けた壮大な自動車旅行が始まります。これは滞欧中に購入したカメラを手にしている鳩彦王です。現在でも、このとき撮影された数千枚という単位の、本当にたくさんの写真

「南佛御旅程概見圖」1924年頃　個人蔵

左：和装姿の鳩彦王と允子妃
右：カメラを手にする朝香宮鳩彦王

が関係者のお手元に残されています。

鳩彦王も允子妃も皆さんそれぞれ思いおもいにアルバムを作られているのですね。当館でも時々ご紹介していますけれど、手書きでコメントを付された写真もあったりして、本当にその旅行を楽しまれてきたご様子がよくわかります。これはアルプスの雄大な自然を背景にして自動車旅行を楽しまれているときの写真ですね。あまりにも疲れてみんな寝てしまっていますけれど。当時は舗装されている道ではないため砂埃が舞うことから、皆さんゴーグルをつけていらっしゃいます。日本での皇族としての生活からは想像もできないような自由な経験を、おそらく現地ではされたのだと思います。

アルプス山脈を背景に記念撮影

パリ帰還途中でひと休み

そしてその自動車大旅行が終わると、今度はイタリア旅行に出かけています。これは皆さんよくご存知のベニスです。ローマにも行ってます。滞欧中、スウェーデンやノルウェーなど北欧のほうにも足を伸ばされています。

この集合写真には鳩彦王は写っていないので、撮影したのはおそらく鳩彦王自身だと思います。こちら〔左から2番目〕は允子妃です。そして〔左端が〕シェイクスピアの稲葉先生。中央が相馬子爵、そしてその隣が藤岡武官、右端が杉岡御用掛です。

北欧旅行中のひとコマ。左から稲葉氏、允子妃、相馬子爵、藤岡武官、杉岡御用掛

藤岡武官は「恩賜の軍刀」の授与にも選ばれた人でした。恩賜の軍刀とは、軍学校などで成績優秀、頭脳明晰、しかも腕も立つということで、卒業の際に天皇から直接賜るもの（軍刀など）です。ですから藤岡武官は大変な腕前だったと思います。現地で実際に武官として腕を振るう場面はなかったようですけれども。やはり皇族が海外に出られるというときにそうした方が選ばれて、現地で一緒に行動されているというのは、ボディーガードの役割も担っていたのでしょうね。杉岡御用掛は、允子

左：ベニスの大運河
右：フォロ・ロマーノ（ローマ）

左：コロッセオ（ローマ）
右：撮影地不詳（北欧？）

妃と一緒に日本から現地へ向かわれて、そのままお世話をするための御用係として帰国まで行動を共にされていた方です。

しかしこの写真は、皇族とそれにお仕えする人々という構図ではないですよね。允子妃の隣であぐらをかいてますよね、稲葉先生。日常の生活を共にしているわけですから、あちらでの生活において、皇族とそれにお仕えする人々という関係ではなくて、まさに家族のような信頼関係ができていたのではないかなと思います。

朝香宮邸の誕生に関しては、パリ滞在中にアール・デコ博覧会を見学されたことが契機となり、帰国後アール・デコスタイルのお住まいをお建てになった、というただひとことで済むような動機ではないように思います。事故も含めて、滞欧中のこうした一つひとつの体験がすべて重なり合って、そしてこのようなアール・デコの館を作ろうと思うに至ったのではないか、僕はそのように思っています。

これはパリのアパルトマンで撮ったお写真ですね。本当にいいお顔をされています。鳩彦王と允子妃と杉岡御用掛と、現地で雇用された御用掛のボナルさんです。

左からボナル御用掛、朝香宮鳩彦王、
杉岡御用掛、允子妃

朝香宮夫妻の土産物

朝香宮夫妻は1925年10月末に、パリ（フランスのル・アーブルの港より海路）から一旦ニューヨークに渡ります。そしてアメリカ大陸を横断して日本に帰ってくるという世界一周のルートで帰国するわけです。

この際、夫妻はいくつか興味深い品々をお持ち帰りになっています。箱の題箋に「硝子製金魚模様花瓶壱個」と書いてあり、この画像だと見えづらいのですが、その右下に「仏国よりお持ち帰りの品」と書いてあるのです。お気付きの方もいらっしゃると思うのですけれど、これはラリックなのです。

帰国を前に夫妻で記念撮影

ルネ・ラリック《フォルモーズ》
1919年　個人蔵

ロイヤルコペンハーゲン《三羽揃ペリカン（ペンギン）》1902年頃　東京都庭園美術館蔵

竣工当時の小客室（部分）

先ほどご紹介したパリの受領証のなかには、この作品を購入した際の記録に相当するものはないのですが、夫妻は他にも何度かラリックのブティックに行ってお買い物をしている痕跡があります。その際に記念の品としてお求めになったものではないかなと思います。この他にもお子様方へのお土産としてラリックのペンダントを買ってきたりしているので、ラリックは結構お気に入りのブランドだったのではないかなと推測しています。

そしてこれ。当館でも大人気である、ロイヤルコペンハーゲンの三羽揃いのペンギンです。これもやはり箱書きの裏に「大正十四年十二月両殿下御帰朝ノ節御持帰品」とあります。

これ､保管用の箱の蓋表には「三羽揃ペリカン」と書いてあるのです。なんで？ って感じですよね。おそらく荷物が日本に着いて宮邸に届けられて、それらを整理している過程で、お側の御用を務めていた女官さんたちが「これ何だろう」と。そうしたら殿下が「これはね、ペリカンと言ってね……」みたいなことを仰ったんじゃないかと僕は考えていますけれど、その実はわかりません。ただこれは明確にペンギンの像なのですが……。

これについても、ちょっとおもしろいエピソードがあります。先ほど、僕がこの美術館に就職した頃は謎だらけだったというお話をしました。謎はいっぱいあったのですが、物は全然なかったのです。朝香宮邸としての建物はありましたが、当時使われていた家具や、こういった身のまわりの品々はほとんど何もなく、外に出てしまっていました。そして当時、そういうものをお持ちの方がいろいろなところにいらっしゃるという情報が、徐々に徐々に集まってきていました。ですから建物を紹介する展覧会を開催しようとすると、そういった方たちにその都度連絡をとって「殿下の書斎の電話台を貸してください」などと出品交渉をしていました。今となっては懐かしい思い出です。

そののち現在に至るまで、いろいろご理解、ご協力をいただいたりして、また時にはお金で解決したりして、外に出ていたお品を徐々に美術館のなかに戻す活動をしてきました。そしておかげさまで、宮家旧蔵の家具ですと言えるものが館のほうにもそれなりに戻ってきていまして、現在ご覧いただくことができています。

さて、僕が庭園美術館に入って最初に担当した展覧会は建物公開展でした。「建物公開展って何をやるのですか」と先輩の学芸員に聞いたら、「建物そのものを紹介するんですよ」と言われて、それでいいのかなと思っていたら、それなりにちゃんと家具などを配置してください、所蔵者のご連絡先はこれこれです、ということでした。それで電話をかけまくって家具を集めて、初めての展覧会を無事に開くことができたのですが、そのときにとても気になったのがこのペンギンだったのです。

このペンギンは、宮邸竣工時「小客室」に飾られていたことが当時の写真からわかっていました。先輩学芸員に「この写真に写っているペンギンもないのですか」と言ったら、それはもうどこに行ったかもわからないという話だったのですけれど、それから20年ほど経て、ある日突然電話がかかってきました。

電話口「大正14年の12月に帰国された宮家というのは、そちらの朝香

宮様ですか」

牟田学芸員「そうだと思います」

「今、手元にそういう箱書きを伴ったペンギンの像があります」

「ペンギンですか!?　もしかして、それって三羽揃っていませんか」

「そうです」

「それ、右向いてますか、左向いてますか!?」

というのは、古いお写真に写っているペンギン君たちが右を向いているのです。「左向いてますね」と言われて、なんだ違うのかと一瞬がっかりしたのですが、「でもこれ、クルッと回すと右向きます」と言われました。「ええっ！」と、こちらが驚いた声を出すと、電話の主も初めて素性を明かしてくださいまして、表参道にある老舗の骨董店さん「富士鳥居」さんという店の御店主、栗原直弘さんでした。

「今からちょっとそれ、見に行ってもいいですか!?」とその場でお約束を取り付けて、その日のうちに会いに行きました。感動しましたね。もう本当に涙を流していました。ついに出会えたという感じです。このペンギンと再会、と言っても私は初めてですけどね。「はじめまして、お帰りなさい」みたいな感じですけれども。そこでの感動の仕方があまりにも凄まじかったらしくて、栗原店主が「今、決めました。これは美術館に寄贈します」と仰ってくださいました。もう覚悟を決めて、次のボーナスをすべて注ぎ込んででも自分で買おうと思っていましたから、「いくらかな、いくらかな。御店主いくらって言うのかな、いくらまでだったらなんとかなるかな」と相当困った顔をしていたのでしょうね。それを見たご店主が「寄贈します」と仰ってくださって、晴れて宮邸に戻ってきました。後から栗原店主がこのときのことを振り返って、「生き別れの親子が再会したようだった」と明かされています（笑）。

これは内部の後輩学芸員にもあまり話したことのないエピソードですが、今思い出したので少しご紹介させていただきました。

宮邸建設の立役者たち

そして日本に帰ってきてから、先ほどの白金御料地となっていた、本来であれば皇族方のレジデンスとなるはずだったこの地で、朝香宮邸の建設計画が始まるわけです。

それについて中心となって動いたのは、宮内省内匠寮工務課というセクションの権藤要吉という優秀な技師さんでした。これが当時の宮内省内匠寮のスタッフで、最前列の真ん中に座っているのが権藤技師です。

この権藤技師が中心となって宮邸建設計画が進められるのですが、その際に設計図書というものを宮内省のほうで作成しています。『朝香宮邸新築工事録』、これは現在も宮内庁の公文書館に残されています。

もうひとつ、実際に支出をした関係、要するに契約書類です。いろいろ物や工事を発注し、それに対して請負契約を締結した宮家側の記録として残された『御新築関係費書類』という一式があります。

そういったものが残されていて、ある程度、日本側が担当した工事の概要を知ることができます。

権藤技師自身は朝香宮と前後する形で、やはり欧米の貴族の邸宅や公

宮内省内匠寮の人々
（最前列中央が権藤要吉技師）

『朝香宮邸新築工事録』宮内庁公文書館蔵

共建築を研究するために数年間研修旅行に出ています。もちろんアール・デコ博覧会も見ていますし、各国の最新の建築の動向なども見ています。詳細な日記も残されていますので、権藤技師がどこへ行って何を見たかを知ることができました。朝香宮新邸の建設計画に対して、まさに適任だった技師さんでした。

権藤技師が中心となって朝香宮新邸の建設計画が始まったのは、だいたい昭和４（1929）年頃からだと思います。同時に主要室内の内装については、アンリ・ラパンに直接委ねたいという希望が宮家から出されています。

これがアンリ・ラパンです。先ほどアール・デコ博覧会で活躍をしていたとお話ししました。

そういった希望を宮内省は受けて、ラパンとのやりとりについては宮家が中心となって進められたといわれています。中心となってといっても誰か間に入っていたのでしょうけれども、宮内省経由ではなくて、フランス側とのやりとりは宮家側でルートを作って、発注や仕様の詳細が決定されていったようです。ただそのあたりの経緯は現在でもまったくわかっていません。

冒頭にお話しした通り、なぜラパンにインテリアデザインを託したのかという疑問が浮かびます。一番単純に考えられるのは、おそらく25年のアール・デコ博覧会を見学したときにラパンと会い、面識があったからお願いしたのではないかというものです。ですが実際それを裏付けようと思って調べれば調べるほど、博覧会におけるラパンとの接点はありませんでした。当時パリで発行された新聞を各紙取り寄せていろいろ調べましたけれども、ラパンのラの字も出てこないのです。美術局の役人の名前などはたくさん詳細に出てくるのですが、美術関係者の名前はほとんど出てきません。ですからそこで接点を見出すことはできていません。

1925年７月９日に行われた夫妻揃っての博覧会見学というものは、日本の皇族朝香宮としての公式訪問です。先ほどの受領証やご家族にあてた絵葉書などの内容を見ていくと、どうもそれ以外にも何度か博覧会に行っていますね。アール・デコ博覧会が当時最新の装飾美術を目の当たりにするきっかけになったのは間違いないのですが、それは７月９日の一度だけではなくて、たびたびそうした経験をされていたのではないかなと思います。そのなかでラパンの作品やラリックなど、いろいろと目にされる機会もあったのではないかと思っています。ただラパンと宮家との直接的な接点はわかっていません。

これは博覧会でラパンも装飾に加わった、「あるフランス大使の館」

権藤要吉技師の旅券　個人蔵

アンリ・ラパン

といったテーマで展示されたパビリオンの一部です。これらはラパンが中心になってまとめた「グランサロン」という大客室です。

「あるフランス大使の館」内の「グランサロン」1925年　アール・デコ博覧会

もうご説明する間でもなく宮邸の大客室そのままですよね、この空間。（そのままと言ったらちょっとあれだけど……。）おそらくこの展示は当時、朝香宮夫妻も見たのだと思います。

さらにこれはラパンが手掛けた殿下の書斎です。博覧会でもこの書斎と似たような展示がありました。これは、ラパンではなくピエール・シャローという別の装飾美術家が手掛けた展示です。円形のドーム天井と、こうした機能性を優先したようなスタイルの家具が当時博覧会において展示され、それを鳩彦王も見た可能性があるということです。

結果として宮邸にも、博覧会でのシャローの書斎に近いものが、ラパンによって実現されています。これはおそらく朝香宮家のほうから希望が出されたのだと思うのです。こういうスタイルの部屋が欲しい、博覧会で見た書斎が欲しいといったことが、かなり積極的に具体的に希望として出されたのではないかなと僕は思っています。

東京都庭園美術館　大客室

左：東京都庭園美術館　朝香宮鳩彦王の書斎（ラパン担当）
右：アール・デコ博覧会「あるフランス大使の館」書斎（ピエール・シャロー担当）

ちなみにこの博覧会で出品されたピエール・シャローの書斎の家具は今、パリにある装飾美術館という装飾美術をテーマにした美術館に収蔵されています。

この美術館はルーヴル宮の一角にあり、誰でも見ることができます。それ以外にも博覧会に出品されていたリュールマンの家具などが多数収蔵されていますので、現地に行かれたらぜひ訪れることをお勧めします。

僕は美術館に入って以来、ラパンが宮家の新廷の内装を手掛けた経緯をどうしても知りたくて、今に至るまで調査を続けています。ここからは調査報告のような形になります。

情報として、ラパンがセーヴルの仕事をしていたことはわかっていま

装飾美術館に展示されているピエール・シャロー《書斎》装飾案

左・中：装飾美術館の展示室風景
右：装飾美術館の展示より

したので、セーヴルの製陶所のアーカイブに行っていろいろ調査をしたりもしています。これはセーヴルからラパンに支払われた報酬の明細書です。

ラパンに支払われた報酬の明細書
セーヴル製陶所文書館蔵

博覧会でセーヴル製陶所パビリオンの仕事を手掛けたのちに、ラパン自身はセーヴル製陶所の芸術監督のような立場で、いろいろな製品のデザインや監修などを行っています。その他にもパリの15区だったかな、区役所の内装なども手掛けています。

これは特別に許可をいただいて撮影した区役所の壁画の写真で（許可を取るのも結構大変だったのですけれども）、ラパンが手掛けた壁画です。

パリ15区役所内の壁画

それからこれはフランスの図書館で見つけた資料です。ラパンが1932年の美術サロンに出展したモックアップの写真です。「ある貴族の館」みたいなタイトルだったと思うのですが、一見して朝香宮邸のモックアップだとわかります。

朝香宮邸大広間ほかのモックアップ写真
（『ラ・コンストラクシオン・モデルヌ』
No.13　1932年所収）

日本にデザイン案を送る前に、ラパンはそれをサロンに出展しているのですね。これが実際にどのくらいの大きさの模型だったのかわかりませんが、こういった具体的なイメージを掴めるものを制作して、おそらく日本にも送っていたのだろうと思います。ラパン自身は一度も日本に来たことはありませんでしたから、建設に際しては詳細な図面も必要ですし、いろいろなやりとりが日本とパリとの間で行われたはずなのですが、現在に至るまでその断片すら出てきていません。一方で、こういった状況証拠的なものは徐々に出てきつつあります。この模型（モックアップ）自体は今どこにあるのか、残っているのかさえもわかりませんけれども……。

そうしたなかで、これはもうラパンの関係者と直接コンタクトを取るしかないと思い、いろいろ調べてついにその方々と会うことができました。

これはパリ郊外のある町に建っている、ラパンの親族のお住まいです。もともとラパンの姪夫妻の住まいとして、ラパンと弟のジャックという建築家が一緒に設計をしたお家です。今もそのまま残っています。

テレビ番組のように「こんにちは、庭園美術館です！」と言って突然訪ねたわけではなくて、事前に丁寧なやりとりを重ねた末に許可をいただいて、やっと伺うことができました。中に入れていただくと、ラパンが手掛けたこのような家具が残っていました。

ラパンの家具を見つけたことが嬉しくて、この後展覧会のために日本に持ってきてご紹介したことがあります。フランスから家具を持ってく

ラパンと弟のジャックが設計したマリネ邸
「シャンテリエンヌ」

左：ラパンがデザインした食器棚
右：ラパンがデザインした食卓テーブル

るのは大変なので、ものすごくお金がかかってしまい、上司から怒られてしまいました。

ご親族のお手元にはこういったラパンの写真ですとか……。

マリネ邸の庭でくつろぐアンリ・ラパンと夫人

あとはこれ、装飾美術家協会の会合のときの写真です。右端を見てください。上が少し足りませんが、これ、皆さん「アー！」ですよね（笑）。

装飾美術家協会バンケットの写真　1933年

旧朝香宮邸の中をよくご覧になっていただいている方は、即座におわかりだと思います。「次室（つぎのま）」にある香水塔の本体部分なのです。これは唯一無二なものではなくて、セーヴル製陶所で「ラパンの輝

く器」と題されて、いくつかシリーズで作られているようです。これの上に載るものも、美術館に今あるような噴水の渦巻き模様だけではなくて、いろいろな形のものが試作されています。ですからこれは現在皆さんがご覧になっている宮邸の香水塔そのものではありません。しかしこれを初めて見たときは、やはりびっくりしましたね。

ちなみに器の前に座って横を向いている人物がラパンです。おそらくこの写真には当時の名だたる装飾美術家の人たちがずらりと並んでいるのですが、僕はラパン以外には関心がないので、どれが誰だかまでは調べていません。

あとは庭園の構成プランのようなものや、ラパンのポートレート写真もありました。

左：庭園のプラン（ラパンによるデザイン画）
右：アンリ・ラパン

「シャンテリエンヌ」と名付けられたこのお家の中にはレリーフがあります。

気が付いた方もいらっしゃるかもしれませんが、このレリーフは、アール・デコ博覧会で「あるフランス大使の館」の大客室（グランサロン）に装飾として使われていたこの部分〔写真上部〕です。

これが実は、ラパンの建てたこのお家の中に移設されて残されていたのですね。感動しました。さすがにこれはお借りするわけにはいかなくて、展覧会には出品できなかったのですが、今もそのまま残されていると思います。

マリネ邸の室内装飾レリーフ

アール・デコ博覧会
「あるフランス大使の館」
グランサロン

こちら〔左から２番目〕が、ラパンの弟ジャックのお孫さんであるギヨーム・ラパンという方です。後ろからそっとお顔を出しているおじい

アンリ・ラパンの親族

さんは、ラパンの姪の配偶者エミール・マリネ氏です。二人の女性はマリネ家の方々です。

ラパンにはこどもがいなかったので、現在はこの方々がアンリ・ラパンに一番近い親族ということになります。

実は、展覧会に合わせて親族の皆さんを日本にお呼びし、朝香家の御当主と握手をしていただきました。僕としては歴史的な瞬間だと思って興奮しましたが、全く話題にならなかったですね（笑）。でもそうしたご縁でほとんど家族のようなお付き合いをさせていただいていて、今でもフランスに行くとご挨拶に伺ったりしています。

マリネ氏はかろうじてラパンのことを記憶されていました。ただし、日本の皇族邸の仕事をしたということや、具体的なやりとりについてはわからないと仰っていて、有効な証言は得られませんでした。マリネ氏によると、ラパンはとても背が高く、物静かだが誠実かつ温厚な人柄もあって、周囲から慕われ、誰もが彼と一緒に過ごすことを望むような、そんな人物だったようです。

これは1925年に完成したマリネ邸の建築模型です。これがあるならば宮邸に関する資料も何かあるのではないかと思って家中捜索したのですが、何も出てきませんでした。

左：マリネ邸の建築模型
右：マリネ邸のテラス

このマリネ氏はとてもチャーミングな方で、「研究頑張ってね！」と去り際に笑顔で見送ってくださったのですけれど、残念ながらこの後それほど間を置かずして亡くなられてしまいました……。

アンリ・ラパンの姪の配偶者エミール・マリネ氏

もうひとつ残念といえば、このイヴォンヌ・ブリュナメールさんとい

うアール・デコ研究の第一人者についてです。先ほど少しご紹介したパリの装飾美術館の館長をかつて務められた方です。ブリュナメールさんには本当にお世話になりました。

イヴォンヌ・ブリュナメール氏と牟田学芸員

今われわれは「アール・デコ」という言葉を普通に使っていますけれども、そのアール・デコという言葉を作った方です。要は1925年の博覧会当時には、アール・デコという用語はまだなかったのですね。博覧会が開催された年をとって1925年様式と称したり、日本では「モダン」という言い方をしていたようです。アール・デコという呼称が世の中に広まるようになったのは、このブリュナメールさんが1960年代に装飾美術館で、1925年の博覧会をテーマとした展示をなさったときからです。彼女が略称としてアール・デコという言葉を使い始めたことが契機となって、広く使われるようになったというわけです。ブリュナメールさん自身、装飾美術全般にわたる偉大な研究者でしたし、ラリックの専門家でもありました。

ブリュナメールさんからもいろいろ公私にわたって励ましていただいたのですけれども、残念ながら一昨年だったかな、亡くなられてしまいました。調査に行き詰まってつらいときも、「頑張りなさい！」と、本当にいろいろな場面で励ましてくださり、そのときのことを思い出すたびに泣きそうになってしまいます。

亡くなった方といえば、これはラパンが友人の画家アンリ・ベレリ＝デフォンテーヌのために手掛けた墓〔左の写真〕です。パリのモンパルナス墓地にあります。モザイクや彫刻も施してあって、友人のためにとても綺麗に装飾していますが、ラパン本人のお墓はこちらです〔右の写

左：ラパンの友人アンリ・ベレリ＝デフォンテーヌの墓
右：ラパン夫妻とその両親の墓

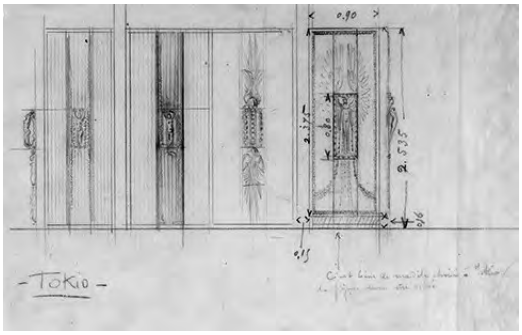
真]。「FAMILLE RAPIN」と彫ってあるだけです。ラパン夫妻とその両親がここで眠っています。

先ほどご紹介したギヨームさんに「ラパンのお墓はどこにあるの」と尋ねたところ、「モンパルナスだよ」と言うので、墓地中歩き回ってやっと見つけました。僕はパリに行くたびにお墓参りしているのですが、おそらく現地の人でもラパンのお墓を訪ねることは、今あまりないのかなと思います。まして日本人でラパンのお墓をお参りしているのは僕だけではないかと思うので、みなさんももしご関心があったら、ぜひモンパルナス墓地のラパンに会いに行ってください（笑）。

ルネ・ラリックの作品が宮邸内に残された経緯に関しては、先ほどからご紹介している通り、朝香宮夫妻がもともと興味をもっていたこともあり、その関係でラパンを介して、宮邸の内装にも彼の作品をと夫妻が望んだ結果ではないかなと思います。謎だらけのフランス側とのやりとりのなかで、このラリックに関してだけは例外的に、日本と調整をした記録が残っています。

東京都庭園美術館　正面玄関のガラスレリーフ
ルネ・ラリック作

この正面玄関扉のデザイン画は、実は今、日本にあります。長野県諏訪市にある北澤美術館に所蔵されていて、庭園美術館でも過去にラリック展を開催したときに何度かご紹介したことがあります。ラリックのほうから４案装飾パターンが提示されて、そのうちの一番右側が日本で選ばれたものです。右下にその際のメモ書きのようなものがあり、これはラリック自身の筆跡だそうです。〈これが東京で選ばれたモデル、ただし人物に薄布を着せること〉と記してあるそうです。



ルネ・ラリックのデザイン画
《朝香宮邸扉》1931年　公益財団法人北澤美術館蔵

このデザイン画から、ラリックが提示したのは裸婦像でしたが、それを日本側が検討した結果、デザインとしては右端の女性像で、裸ではま

ずいから衣を着せてねと回答しているということです。そうして、今われわれが見ることのできるこのガラス扉が出来上がりました。

僕は美術館に入ったばかりの頃にこの話を聞き、裸婦像に衣を着せろと仰ったのは允子妃ではないかなと思っていました。鳩彦王は「このままでいいじゃないか」と仰ったんじゃないかと……。允子妃が「オモウサマ、いくらなんでもそれは……。宮邸ですよ」……なんてやりとりを想像していたのですが、いろいろと調べていくうちに、衣を着せろと仰ったのは、実は鳩彦王のほうではないかなと思い始めています。允子妃は想像以上に芸術に対する深い造詣をお持ちだったことがわかってきたことで、案外衣に関するやりとりも、想像とは逆だったのではないかなと最近では思っています。もちろん確証はありませんけれど。

ラリックはこのようなことで、かろうじて日本とのやりとりがうっすらとわかります。ですがラリックが起用された経緯というものも、きちんと裏付けられているわけではないので、あくまでも推測でしかありません。

そしてこれは宮邸の大広間にある、ブランショが手掛けたレリーフと大食堂に残されたプラスターのレリーフです。

左：ブランショによる大広間の大理石レリーフ《戯れる子供たち》

右：東京都庭園美術館の大食堂

先ほどから何度も申し上げている通り、ブランショの詳細については、僕が美術館に入った頃は一切わかりませんでした。ただ受領書の調査から、妃殿下がパリに滞在されていたときに水彩画を習っていた先生であるところまではわかりました。そこから先、どうするか……。

ブランショに関して本腰を入れて調べ始めると、結構いろいろなことがわかってきました。例えばルーヴル美術館が入っているルーヴル宮の

ルーヴル宮のニッチ（壁の装飾用のくぼみ）に設置されたブランショ作の彫刻

一角に、こうしたニッチの中に人物像がいくつも並んでいる装飾が施されていますが、そのうちのひとつをブランショが手掛けていました。

あとこれはですね、セーヴル製陶所のアーカイブで見つけました。実はブランショもセーヴルで仕事をしていて、ラパンと同じような役職に就いていた時期があります。

ブランショに関する書類　セーヴル製陶所文書館蔵

こちらはフランスの国立公文書館です。ここに行ってブランショの資料をダメ元で開示請求してみたところ、出てきました。

左：フランス国立公文書館
右：ブランショに関する書類の綴り

綴りの表紙に赤字で〈故人です〉という但し書きがあり、その下にSculpteur〈彫刻家〉だとあります。そして当時の住まいが書いてあるのです。パリ市内14区のトンブ・イソワール通り37番地に当時ブランショは住んでいた、と。中を開くとこのような写真が出てきました。

ブランショ（左端）と胸像のモデルとなった男性

真ん中ではないですよ。左端がブランショです。右側の男性は顧客で、ブランショはこの方の胸像を作っているわけです。うまいですよね。彫刻家としての腕前はかなりのものだったと思います。でも売れないのですけどね。

そしてこれは当時国に対して提出している、質問に答える形での自己PRです。これが出てきたことによって、1868年11月ボルドー生まれということまで全部わかりました。髪の色は何色、瞳の色は何色ということが書いてあったりもします。彫刻家としていろいろな観察眼に長けています、とも……。

BLANCHOT

-6 AVR 1944

QUESTIONNAIRE

A remplir et à renvoyer d'urgence
au Secrétariat Général des Beaux-Arts
Bureau des Travaux d'Art
2, rue de Valois
Paris

Où êtes-vous né ? à Bordeaux (Novembre 1868)

Dans quelle région avez-vous été élevé ?

Où avez-vous fait vos études artistiques ?

De quelle région votre famille est-elle originaire ?

公文書館に残るブランショの自己PR

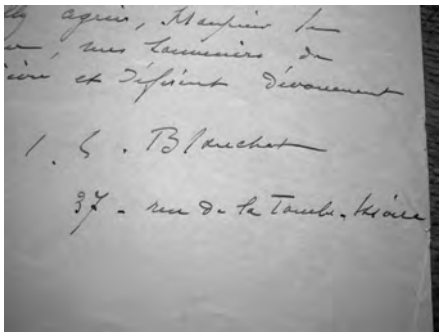
そしてどうも飛行機乗りだった時期もあるようなのです。飛行機で敵地の上空に乗り込み、そこで素早く敵情視察をしてスケッチにまとめて持ち帰ることができるとアピールしています。第一次世界大戦が勃発すると、もう40歳を過ぎていたはずですが、自ら志願して戦地に赴いているのです。要するに愛国心が大変強かったのですね。

さらに驚いたことに、この写真が出てきました。これはフランス語で〈パレ・ドゥ・プランス・アサカ　東京　1930から1931〉と書いてあります。宮邸のレリーフを手掛けていたときに手元の控えとして撮影をした写真です。それがパリに残されていました。これを見つけたときも大変感動しました。

宮邸のためのレリーフ《戯れる子供たち》の記録用写真

さらに公文書館にもセーヴルで仕事をしていたという記録がありました。1925年のアール・デコ博覧会のセーヴル製陶所パビリオンですね。先ほど朝香宮夫妻が公式視察をして青い壺が云々と言ったあのパビリオンですけれども、実はその建物の装飾にもブランショは関わっていたのです。ここでもラパンとの接点が出てきました。

MANUFACTURE NATIONALE DE SÈVRES


agréer, Monsieur le
mes salutations
et Distingué dévouement
L. G. Blanchot
37 - rue de la Tour-d'Auvergne

ブランショ直筆のサインと住所が記された書類

ただこの記録、内容的には〈ブランショさん、あなたに発注をしたパビリオン外壁装飾のためのレリーフが納期に間に合っていませんよ、早くしてください〉という督促状なのです。どうしようもないですね。

そのなかにも、やはり「I.L. Blanchot」というサインがあって、〈37番地トンブ・イソワール通り〉と書いてあります。

トンブ・イソワール通り35番地（中央左）と37番地（中央右）

行ってみました、トンブ・イソワール通りなるところ。これは僕が実際に現地で撮った写真で、ここが37番地です。

現地を訪ねてあることに気が付いてしまいました。この中央右寄りの建物が、ブランショが宮邸のための仕事をしていたときに住んでいた37番地です。その同じとき、ラパンも宮邸の仕事をしているわけですよね。ラパンの住まいはラスパイユ大通りという別の場所にあったのですが、彼がアトリエとして使っていたところは、なんとトンブ・イソワール通り35番地なのです。それがどこかというと、こちらの中央左寄りの建物です。

35番地と37番地。もうほとんど壁を挟んでお隣同士……。これはたんなる偶然なのでしょうか。同じ時期に宮邸装飾の仕事をしていたインテリアデザイナーと、宮家とも私的に交流のあった彫刻家。こんな近いところで……偶然とは思えないですよね。

ここから、朝香宮家から誰か適任のインテリアデザイナーはいないかと相談を受けたブランショがラパンを紹介した、というある種のストーリーが浮かび上がってきます。今後はそれを裏付ける作業が待っています。

モンパルナス墓地にあるブランショの両親の墓

ちなみにその後何をやったかというと、ブランショのお墓探しに行きました。（今回はお墓の話ばっかりなんですけれども。）これ実は、ラパンのお墓のすぐ近くで見つけました。

これはブランショ自身ではなく、ブランショの両親のお墓です。ラパンの墓の近くにブランショの両親の墓があったという些細なことだけで、僕は感激してしまいました。やはり両者に何か関係があったのではないかなという気がしてなりません。

朝香宮鳩彦王と允子妃、ラパン、ラリック。そして最後に鍵を握るのが謎の彫刻家ブランショではないかなと思っています。

今年、庭園美術館は開館40周年を迎えます。実は僕の人生計画では、これまでに日本とフランスのやりとりの過程が資料として出てきていて、その成果を40周年の記念展覧会にまとめるということになっていました。残念ながら、現在に至るまでまだ資料を見出すことができていま

せん。パリ中というかフランス中を探し回ったのですが、本当に不思議なくらい見出すことができていないのです。ですから今日のレクチャーの結論としては、まだよくわからないことだらけであることがわかったということになります。

しかし諦めたわけではありません。好奇心と体力の続く限り探求の旅を続けようと思っていますし、いつかすべての謎が明らかになって、皆さんにまたご紹介できる日が来ることを僕自身は信じています。もし僕が果たせなかったとしても、今日この場で皆さんと一緒に話を聞いてくれている後進の学芸員たちが、きっと志を継いで実現してくれるのではないかなと期待しています。（みんな聞いてくれてる?）なんだか引退会見のようになってしまいましたけれど、今日のお話は大体こんな感じで終えたいと思っています。

そうだ、中には嬉しいこともありまして、こうして地道に調査を続けていると、やはり情報が集まってくるのです。先ほどからご紹介をしている、允子妃と一緒に現地に行かれた御用掛の杉岡女史のお孫さんが、実は今日、この場に来てくださっています。

それも本当に偶然なのです。数日前にお電話があって、「たまたま2019年に庭園美術館を特集したNHKの『ブラタモリ』を数年遅れで見ていたら、祖母らしき人物が映っていた。ちょっと気になったので祖母が仕事をしていたところを見たい」というご希望だったのです。そこで、今度こういうレクチャーがありますから、それに合わせていらっしゃいませんかと強引にお誘いをしたところ、今日ご参加くださっています。そして新たに、杉岡御用掛が日本から旅立たれたときにお使いになっていた旅券や、現地で撮られたお写真をまとめたアルバムなどの資料をお持ちくださりました。

こうして少しずつですけれども、いろいろなことが徐々に明らかになりつつあります。今も現在進行形でプロジェクトを展開していますので、皆さんももしどこかで何かの情報にめぐり合うことがあったら、ぜひご一報ください。できれば僕が元気なうちに、お願いします。

というところで、レクチャーになったのか、なっていないのか、よくわかりませんけれども、今日の僕の話はこれで終了としたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（了）

東京都庭園美術館 紀要 2022

発行日：2023 年 8 月 26 日
編　集：東京都庭園美術館
制　作：株式会社公栄社
表紙デザイン：有限会社アルカ
発　行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館
〒108-0071 東京都港区白金台 5-21-9
Tel：03-3443-0201

The Bulletin 2022
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

August 26, 2023 Edited by Tokyo Metropolitan Teien Art Museum
Produced by Koei-sha Co., Ltd.
Cover design by Arca Co., Ltd.
Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum © 2023
5-21-9 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-0071 Japan
Phone 03-3443-0201

Printed in Japan